

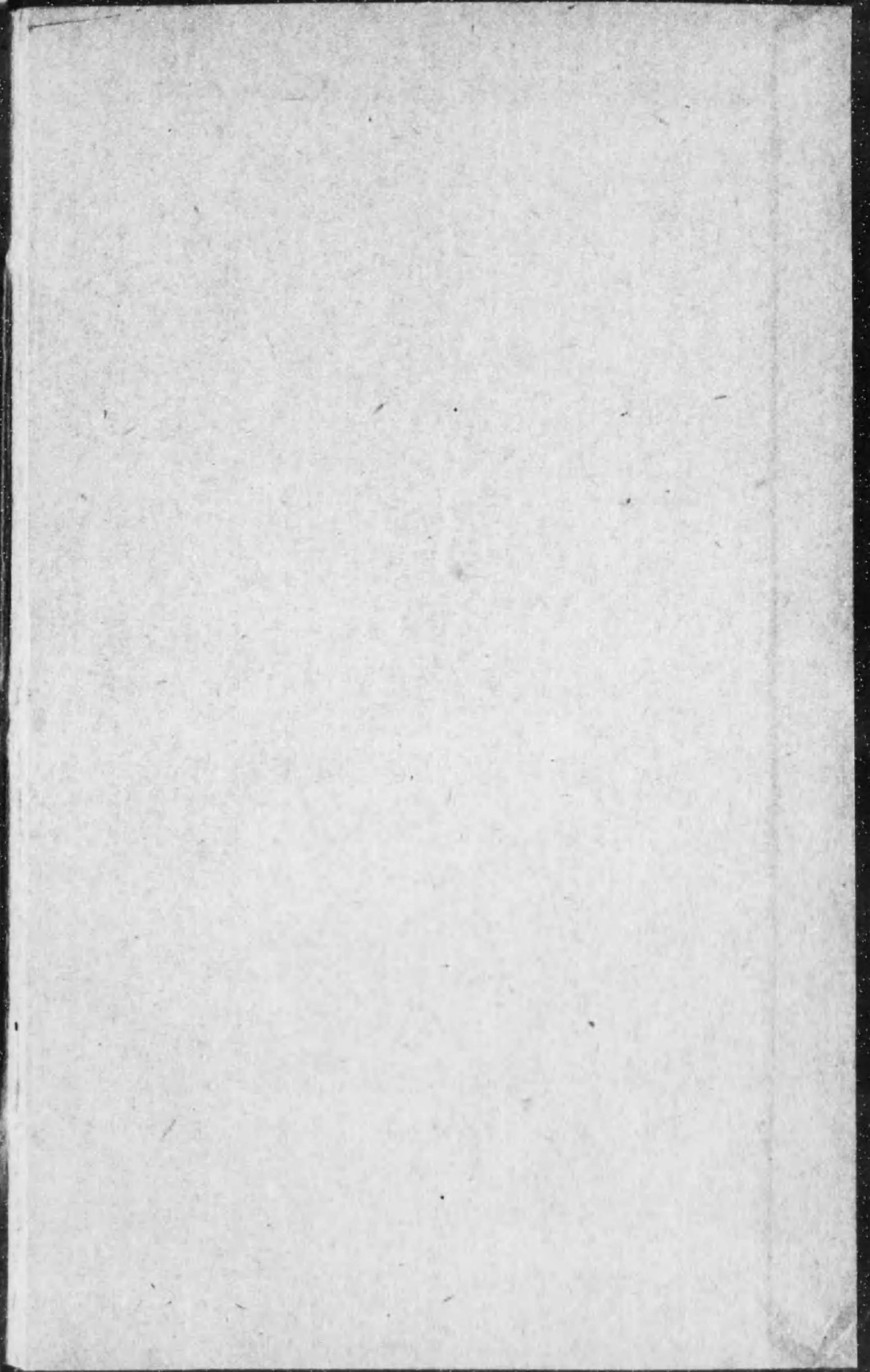
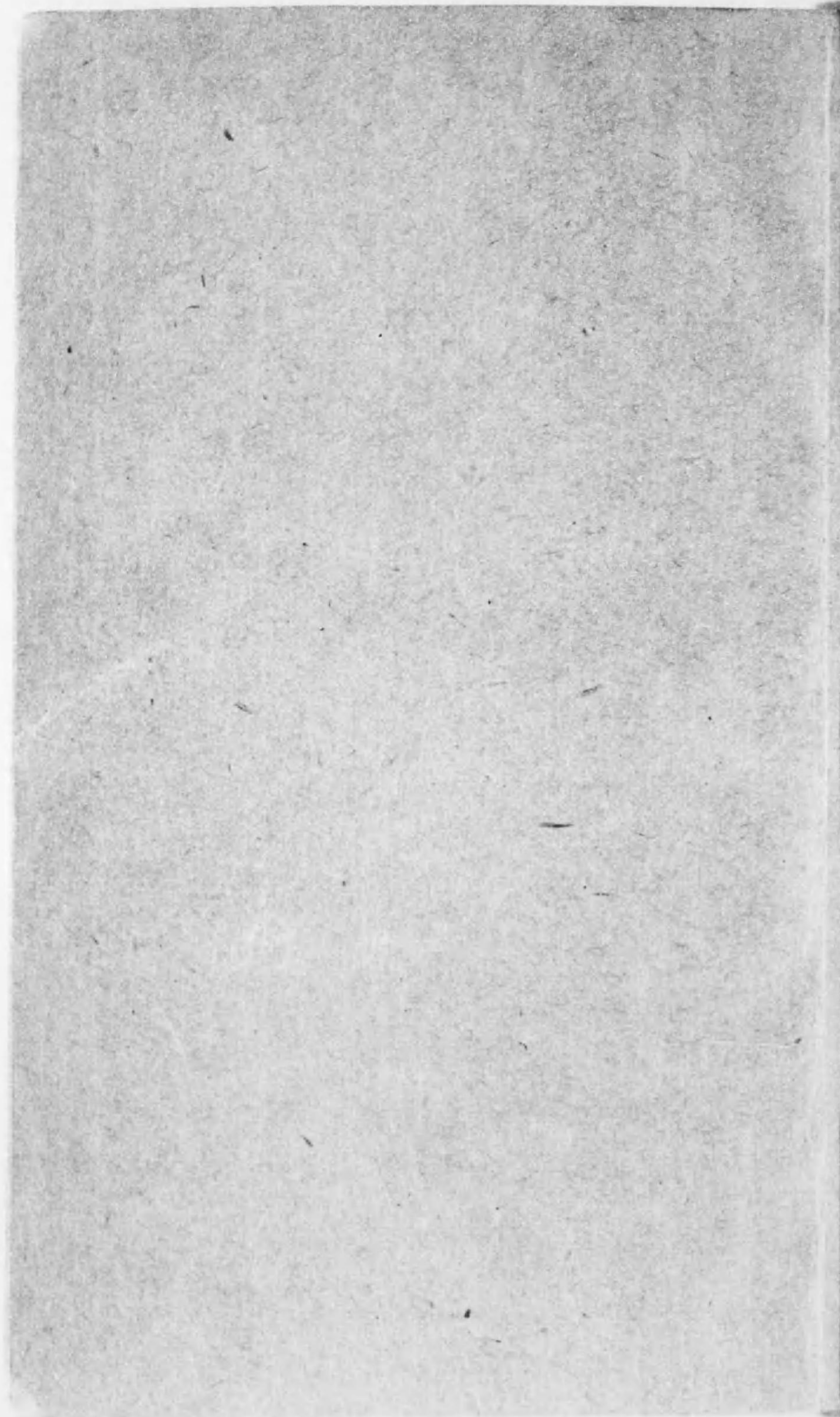
506

172



始





506-172

愛

の

極

み

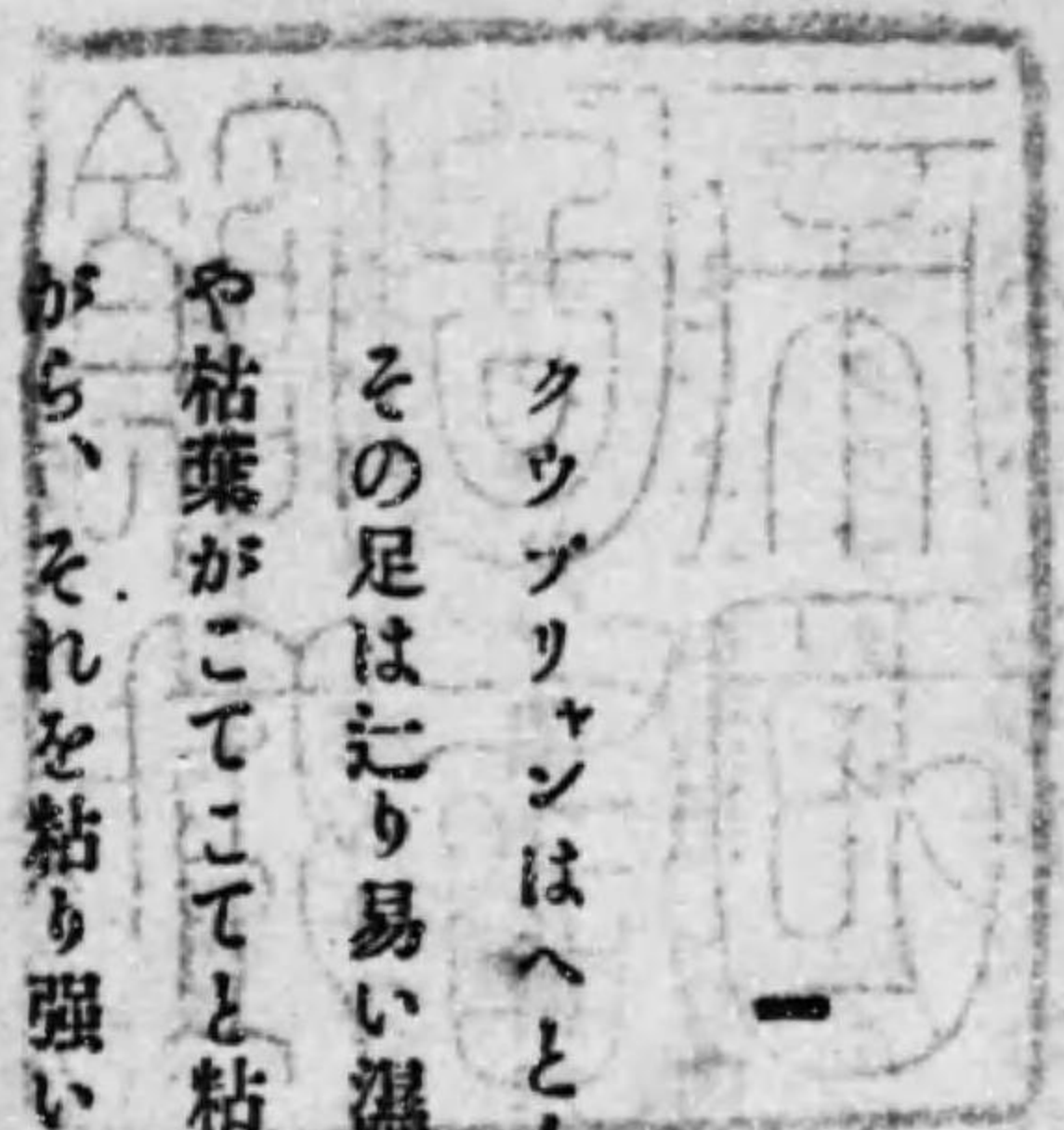
アルツイバーセフ原著  
昇曙夢校閱  
高野槌藏譯

天  
佑  
社  
出  
版

大正  
11. 7. 14  
東京

1724

# 愛の極み



クウブリヤンはへとくになり、またぶぶ濡れになった。

その足は迂り易い濡った丘陵を力無くのたくり廻つてゐた、長靴は潤つた上に泥や枯葉がこてこてと粘りついてえらい目方になつてゐた。クウブリヤンは苦心しながら、それを粘り強い濃厚な泥濘の中から曳き抜いてゐた。

クウブリヤンは空腹だつた、それに昨夜一睡もしなかつたから、頭の中がざわついて、眼の上の所に何だか心持の悪い重しが懸かつてゐた。かうした感觸へ持つて来て、もう一つ、背後に立つてゐる危険の意識が不斷に附纏ふて仕方がなかつた。

クウブリヤンは気がくしゃくしゃしてゐた。それは饑ゑ細つた狼が四方八方から攻め立てられて、くしゃくしゃするのと同じであつた。

空はもう昨日のうちから掻き曇つて、雨が小歇みなく降つてゐた。林の奥は穴藏のやうに暗く、じめじめしてゐた。細い白樺の幹もやつと見分けがつく位であつた。細かい霽陶しい雨は、さらさらと静かな音をたてながら、その樺の木の淡い秋の葉末を洩れて來るのであつた。上の方も暗く虚しくつめたく、下の方も亦濕つてつめたかつた。濕つた樹木と濕つた地と宙にしよぼよぼと煙つてゐる雨から、濕つた寒さといふ一の共通した印象が得られるのであつた。

クウブリヤンは殆んどまさぐりながら先へへと進んでゐたが、時折つるつると小丘から沁つたり、冷たい水の溜つてゐる深い溝にさんぶりと膝まで没したりした。彼は黙つて歩いてゐた、そして努めて鼻唄を唄つてゐた、が頭の中ではたゞ、一刻も速くデルノーウ・エ村(芝生村の意)へ辿りつきたいといふことばかりを、機械的

に、病的に、惱ましくも思ひ續けてゐた。デルノーウ・エ村は今彼の歩いてゐる所から約四露里の所に在つたのであるが、クウブリヤンはそれを知らなかつた。で、もうすつと村近くに來てゐると思つた。

彼の思想は混亂してゐて條理が立たなかつた。自分の欲しがつてゐる。パンの一片がちらついたり、自分はそこへ行つてゐるのかしらといふ心許ない危惧が芽を伸ばしたりした。が後には何にも彼も混淆して、たゞ一つ、鈍い疲労の感覺ばかりが残るのであつた。

ふと前方にあたつて何やら物音が聞えて來た、しかし雨のさぶめきでよく聴きとれなかつた。誰かステツキで樺の木の幹をそつと叩いてゐるやうに思へた。クウブリヤンはきりツとなつた。

物音は近づいて來た、そしてだん／＼明瞭になつた。やがてクウブリヤンは、樹の根に中る注意深い車輪の音と馬の微かに鼻を鳴らすのを聞きわけた。

その邊は樹木が疏らになつてゐて、病みほけた樺や箱柳のいたいけな群や孤木が廣い空地に離散してゐた。そして其の空地の果は雨と暗がりとに溺れてゐた。

空地の表面は一體に樅の木や樅の木や爽やかな白樺の若い元氣のよい芽生えて覆はれてゐた。其處からは空が見えた。煙つた雨はその空から小歇みもなくそぼ降るのであつた。此處はずつと明るかつた。樺の幹もはつきりと白く見えて、かぼそい生き物のやうに思へた。クウブリヤンは、暗がりの中を泳いで来る馬の姿を見分けることが出来た。見ると路には構はず、雜草や灌木の上を一直線に徐行してゐた。馬の蔭には荷車と、その荷車の上に兩足を垂れて凝と坐つてゐる百姓のひよろ長い姿が、ぼんやり浮び出た。荷車はます／＼路から逸れて、林の方へ、而もクウブリヤンが樅の蔭へ身を隠して立つてゐるその場所を通つて行くのであつた。

「おい！」と、彼は見定めてから、曖昧な聲を出した。そして直ぐ樺樅の蔭から一歩踏み出して、馬の旋毛をつかんだ。

馬は些も怪まず、頭を一振り振つて、クウブリヤンの方へ馴れ／＼しく嗅ぎ寄りながら立止つた。

「で……何うしよつてんだ？」と、荷車に坐つてゐた男が呟いた。

「おい、何を迂路ついでるんだ？」充分親しみを込めて、クウブリヤンはこちらからも問ひかけた。

「俺か、俺はまア俺のことと、」と、百姓は例にない噁れた顔え聲で言ひ始めた。「だが、林のことなら、何だ、神様の前とかはりはないでナ。だから俺は俺の仕事でかうしてる譯だ。あんなこととは違つて……。」

「おい／＼……。『林のことなら』か、」

クウブリヤンはその男の眞似をして變な聲を出した。「悪いことをしていると自分から洩らさア！俺あこんな林に用は無い。伐りたかつたら貴公、皆伐るがいゝや……。奥れてやらう！……。」

クウブリヤンは笑ひだした。

百姓は當惑して、荷車に腰掛けたまゝ黙り込んでゐた。

「村から来たのかえ？」とクウブリヤンが訊いた。「へ、夜を擇んで。それとも昨日から藪にでも潜つてゐたのか？ 何だな貴公も……。」

「で……何うしようツてんだ！」と言ひかけたが、百姓は手綱に觸れて、「ほらア！」とやる。

「どオー！」と、笑を含みながらクウブリヤンが止めた。

「ほらア！」

「どオー……。」

馬は惑つた。そして無意味に一つ所を低徊しながら、泥濘をあがいた。

百姓は一寸黙つてゐた。

「おい……。放したらいゝぢやないか！」と、急に彼は激昂した。

「放さなけりや何うする？」と、クウブリヤンは面白さうにきいた。彼は、此の林の中に一人ぼっちでないのが甚だ満足であつた。

「何うもかうも無えや、放さなけりや……これだ。——見ろ此の斧を、うむ？……。」

「なか／＼貴公、怖ろしい奴だ！ だが、イグナート、貴公も餘程馬鹿だぞ、自分の何が識れないのか……。」

百姓はぎよつとした。

「手前か？」

「俺でなくて……。」

「本當にクウブリヤンだな？……。」

「さうとも！」と、クウブリヤンは笑を浮べた、そして樹の葉か何か捲り始めた馬を棄て、荷車の方へ寄つて行つた。

百姓はぞく／＼する程喜んだ。

「お、クウブリヤだ！俺はまた、何處の馬の骨が巫山戯てるのかと思つた。所がそいつがクウブリヤ……クウブリヤンとは何うだい！」

「それでも斧ツて言ふ氣か？」と、訊いて、クウブリヤンは笑に面相を崩した。彼の齒が闇に光つた。

「馬鹿な！……斧なんツて……あれはほんの威嚇おそかしよう。俺は何かと思つた。所がそれがクウブリヤか……。一體何處へ行くんだ？」

「村へ。」

「何しにまた？」

「暫く頭に會はなかつたから淋しくなつてな……。」

「ま……さか。」と、腑に落ちないらしく引きのぼしてゐたが、百姓は急に何か思ひ當つたと見え、両手で膝の所を叩いて、からりと笑ひ出した。「馬鹿な！笑はせるない……。」

「よし……笑ひたかつたら笑へ！」と、怒鳴りつけて、クウブリヤンはあたりを見廻した。「あのワウイルイチならきいて呉れる、彼奴なら寄越す……。馬は、たしか一頭だ……。」

「え……？おい。」百姓は愕いて口を噤んだ。

又しても、葉末に瀧ぐ雨の音が聞えて來た。それは恰も何者かゞ空地一杯になつて、忍びやかに藪を潜てつ來るやうであつた。

「だからよ……。静かにしてゐるんだ。長いことはない……。」

百姓は本能的に手綱を拾ひあげて、クウブリヤンの體を掠めて馬を進ました。

「待てよ、おい！待てツて言ふに……。」

「なせ？」

「村は静かか？」と、クウブリヤンが訊く。

「巡査が遣つて來た」と、頭を掻きながら百姓が言つた。「それから署長も……。も



ぼつ／＼訊き質してゐる。俺もきかれた……。」

「貴公は何うして？」

「いや、俺は……何でもないんだ。俺の仕事は別だもので、言つたよ、郡長さんの所で馬を幾つかとられたそうだが、それも噂に聞いた事だから、何とも分らない……。」一人はこちの方へ差さつたツて。すると俺に言ふんだ、よし行け、自分が泥棒だから、泥棒を隠してるとよ。」

クウブリヤンは黙つてゐた。

「ワシカには逢はなんだか？」

「一昨日クリウオイ（びつこ 跛者の意）のヒードルの所の裏口で酒を飲んでゐたツたが、署長と聞くと直ぐ様林へ走つた……。たゞ見られたゞだけだ……。」

二人とも黙つてしまつた。クウブリヤンは廣い肩で息をしながら考へ込んでゐた。「ちやア、クウブリヤ左様なら！」と百姓が言つた。

「左様なら！」と、クウブリヤンもうつかり答へてしまつた。

所が、モジャーウイ（しみつたれの意）と人に呼ばれ、村中で一番貶されてゐた此の男は、その場を動かうともしなかつた。馬は頭を垂れて嫩葉を捲つてゐた。クウブリヤンはクウブリヤンで巡査や署長が遣つて來たとすれば、今日、明日と言はず搜索と追立を喰はねばならぬと思案しながら、しみ／＼空を打眺めてゐた。モジャーウイは細い眼を瞬きながら、ばかんとクウブリヤンを見てゐた。雨は矢張悲しげな音を立て、降り頻つてゐた。時々風が林の上を駆け抜けて、その時には雨のさゞめきも奥妙な長びいた鳴動に打消された、が聽てまた細雨の傾い囁きが始まるのであつた。

「何うしたんだ貴公は？」と、我にかへつてクウブリヤンは訊いた。

モジャーウイは俄に蘇つた。

「おゝ、さう／＼、クウブリヤ！」と、彼は頓狂な聲を出した。「あの女については、

手前に言つて置くが——覺をつけろ！……。」

「何？」と、とげ／＼しくクウブリヤンは問ひかへした。

「エゴールが家へ来たぞ。」とモジャーウイは一發喰はした。

クウブリヤンは思はず手から手綱を落して、またそれを取上げた。今度はわけ無く帽子をとつて、またそれを被つた。そして氣の抜けた聲で呟いた。

「まさか、そんなこと……。」

「本當のことだよ」と、モジャーウイは情を込めて言ひ返した。「嘘を吐いて何にする。俺は魯鈍な人間だ、な、クウブリヤン、手前に有體のことを話すんだ。——今日来て女を殴つたぞ……。マトリョーナを！」

「殴つた？」と機械的に、クウブリヤンは問ひ直した。

「うむ、生命に係るほど！」と、モジャーウイが力みかへつて答へた。

クウブリヤンは、一時に寒くなつたやうに、顔色が變つた。

モジャーウイは興奮して咽を詰まらした。

「死ぬ程、どやしたんだ！ 誰の子だ？ ……此のフェーヂカは！ ツて責めてナ。

何うした餓鬼だ？ これにはわけの無え筈は無え……此のフェーヂカには……。貴様は何か？ 本當の亭主が五年も留守にしてれば何か？ ……ツて、それは酷く殴つんだ、女を。」

モジャーウイは頭を振つた。

「それで？」と、クウブリヤンは嗚れ聲を伸ばした。

「それでマトリョーナは白状したサ。實はこれ／＼しかなく……。そんな譯で此の子が出来たツて。またわけもなく餓鬼の出来る筈はないからな。若し彼奴が五年も……。」

クウブリヤンは一點を見詰めて、肩で息をしながら黙つてゐた。

「だからクウブリヤ、もうあの女は棄てろ。下らねえ！ エゴールが昨日居酒屋で

大きなことを言つてゐたぞ、見てゐあの野郎を！……ッて。それは手前のことなんだ。で、一本ぐらッと飲んぢやッてよ……。道はビートル（ベトログラードのこと）式だー。そして言つてゐるんだ、見てゐあの野郎をッて……。だからあんな女は棄てちまへと言ふんだ、村の方へも全く行かぬ方がいゝ！ エゴールに殴り殺されるぞ。がッしりした男で……拳なんか——こんなだ！」

モジャーウイは暗い中で手を開いた。

クウブリヤンは急に激昂した。

「もう行け行け！ 拳が何うしたといふんだ！……。だが、おい見てろよ俺を、機敏な動作で馬はせしめるから……。」

モジャーウイは、吃驚して彼を見あげると、そのまま馬を曳つぱつた。車が樹の根に中つて音をたてた。

クウブリヤンは、ほッと安心した。

「えーおいー」と、彼はモジャーウイの背へ嘯いた。そして「ちェー！ それでも百姓のうちかー」と、賤むやうに唾を吐いてから附け加へたが、忍びやかに樹の根や小丘の上を躍りながら林の奥へ轉がつて行く車の寛やかな音には耳を澄ましてゐた。百姓と馬と車の影は次第々々に暗がりに没し、ごとくといふ音はだんく微かになり、やがて雨のさゞめきに亂されて遂に消えてしまつた。クウブリヤンはほッと溜息をついて帽子を取ると、頭を搔いて考へ込んだ。

「えゝ糞……。戻りやがつかか、兵隊の野郎……。くたばり損つてー」と呟いた。

「人の噂では、何でもえらい病氣だつたといふに……。死にもしなかつた、いや死ぬどころちやあるまい。とうく戻つて来たかー。今頃はマトリローナも……。」

嫉妬と、身を斬るやうな疑惑の感にクウブリヤンは捉はれた。彼はまた苦心しながら路上を歩き出した。

「女が可愛相だ。」と、水溜に踐込んだり濡れた草にひっかたりしながら、彼は考

へてゐた。「エゴールの奴あれを打擲するだらう……。野獸、純然たる野獸だもの……。だがそれも、本當のことをいふと、彼奴にとつてみれば亦あまり……。何なものでもあるまい……。他の女が若しあの立場になつたら手向ひするだらうが、あの女はそんなことはしない。そんな女ぢやない……。やさしい……。」

林はまた疏らになつて來た。

## 二

樹の間には蒼白い溶けるやうな光がちらつき始めた。路は追々畑地へ出た。クウブリヤンは林の端に佇んで、黒い空しい畑地のたゞ中にまるで堆肥のやうに横たはつてゐる村を眺めた。そこにはそぼ降る雨の薄い帷が張られてゐた。

「行かうかしら？」と、クウブリヤンは考へた。「ワーシカの奴、若し愕いて逃げないとすれば、大方ヒュードルの所の物置小屋に寝起きをしてゐるに違ひない。」

彼は緩んだ黒い路を靜かに辿りだした、そして何處に身を忍ばさうかと、自分は逮捕されるか知らぬといふやうな問題は、もうその先、考へなかつた。彼の思想は根こそぎ自分の情婦の夫、エゴール・シバーエフといふ兵隊の歸郷に移つてゐた。彼は禍の不可避的なことを思ふと堪らなかつた、そして此の感じは疲労のために一層募つて來た。

彼は汗と雨とでさぶ濡れであつた。

林にゐるうちはさうでもなかつたが、野良へ出ては虐げられるやうな感じがした。此の黒い開瀾地のたゞ中に、而も低く重く垂れさがつてゐる濁つた灰色の空の下に身を置いて見ると、何うも自分が小さな無力な孤獨なものゝやうに思はれた。クウブリヤンは大苦トスカに囚はれかゝつた。

彼のかたへには半ば頽れかゝつた低い柴垣が続いてゐて、その所々に濡れた棒抗が凸出してゐるだけであつた。

クウブリヤンは柴垣を跨いで、水氣のある軟かい粘り易い畦を歩いて行つた。闇に見えない去年の甘藍キャベツの乾枯びた小山にも時々躓いた。それから溝を跳越して、も少しで落ちる所であつたが、今度は蒼白い夜の晝布に一つの黒點として描き出されてゐた一軒立ちの頰れかゝた物置小屋に向つて、野菜畑を歩いて行つた。物置小屋の彼方には小さい箒みたいな枯れた蘆が大儀さうに揺れてるのが見られた。其處は沼になつてゐて、そのむかうが又畑である。物置小屋の傍には、葉のとれた、かばそい樺の木が一本、泣き出しさうな悼ましい姿をして突立つてゐた。

クウブリヤンは近寄つて聴き耳をたてた。内部はしんとしてゐたが、然しその静寂の中に何か生物がゐて、闇の中から凝と彼を視まもつてゐるのが直ぐわかつた。

「ワーンシカ！」

クウブリヤンはそつとかう呼んで見た。

何物も答へなかつた、たゞ樺の木がみしつと言つたばかり。

「ワーンシカ、俺だ……。解らなかつたか？」と繰返した。

「でもよ……。まア来い。」

押し潰されたやうな聲が餘り自分の近くで答へたため、クウブリヤンはぞつと縮みあがつた。

「何だ貴公……。隠れてゐたのか！」と笑を浮べて彼も小屋の中へ這入つた。

其處は全く暗かつた、乾燥した枯草と古びた埃の香がふんと鼻をうつた。藁屋根を叩く雨のさゞめきは一層烈しく際立つてゐた。

「何處にゐるんだ貴公は？」と、クウブリヤンが聲をかけた。

奥の方で身動きするものがあつた。

「こゝへ来いよ……。あ、轆に突き中るな。」と、ワーンシカがそれを受けて應へた。

クウブリヤンは、乾草をふんで、聲のした方へまっすぐに寄つて行つた。そして人間にぶつかつた。

「静かにしろよ畜生！」と、唾んだその口でワシカはすぐまた楽しげに訊いた。  
「どつちから来た？　ものになつたか？」

「うむ、賣つて来た。貴公のが十六……。」

「うまく行つたな！」嬉しまぎれにワシカは指でもつてばちんと鳴らした。

クウブリヤンは居工合よくするため乾草の中でもちくちくしてゐた。

「さう動くなよ。」と、ワシカが注意した。

「ずぶ濡れになつちやつたい。」

「慣れた事ぢやねえか。」と、ワシカはのんきなことを言つて調子を合せた。

「でも寒いや。」と訴えて、クウブリヤンは顫えだした。濡れた外套は、今物置小屋のぬくもりに浸つて見ると、一層冷たく厭はしかつた。

「暖まらうか……これで！……。」

ワシカが得意さうに何だか闇の中に見せた。

「何だ？」と、クウブリヤンはがた／＼齒の音を立てながら訊いた。

「酒よウ。」と、簡単に説明して置いて、すぐワシカは續けた。「済まねえが。だがなア兄弟、こんなことになるのは俺達にや、ちやんと分つてたんだ……。それが今かうなつたまでだ……。まア一と口やれよ、——咽喉が焦げるやうだ、堪らねえナ畜生……。」

どく／＼と咽喉を通る音が聞えた。

クウブリヤンはベツと唾を吐いた。

「人悪め！」

ワシカは笑ひ出した。

「いゝぞ！　何だかかう節々ふたふたを傳つて行きやアがる。さ　貴公の番だ、一寸やれよ……。採らんかー」と、彼は闇の中をクウブリヤンの方へすり寄つた。  
「採らないで何うなる！」クウブリヤンも笑を浮べた。

そして、一と呑み毎に寒氣の鎮まるのを感じながら、慾にまかせて酒をあふつた。「いゝぞ！」と、ワーシカは言ひつけるのであつた。「もう澤山だ！……。おい兄弟、みんな飲乾しちや駄目だ！ さアさ……おい……。」

ワーシカは不安さうにもぢくしだした。

「それ。」

ワーシカは巧みに器を捕へて、また酒をどくどくとやり始めた。

クウブリヤンはすつと氣持がよくなつた。寒氣も殆んど鎮まつて、胸の中に何となく温いものが宿つた。クウブリヤンはあたりを見廻し始めた。その眼は闇に慣れて、小屋の中でも最早さう暗いとは思はれなかつた。大きな隙間から惚けた蒼白い光が差し込んでゐて、壊れた車輪や樽や竿のやうなもの、輪郭が見えた。首ッたけ乾草に埋まつてゐるワーシカの影も嘖嘖と描き出されてゐた。

雨は矢張同様に降り頻つてゐた。時々風が襲つて來ると、樺の木だか極だか悲し

げな音を立てるものがあつた。

クウブリヤンはまたマトリョーナのことを想ひ出して溜息をついた。

「何よう？」と、ワーシカが訊いた。彼は飲んだ酒の酔が廻つて、何となく話がして見たかつた。

「まづいや、兄弟……。」

「何がよ！」と、ワーシカは抜けたやうに訊き返した。

「まづいつて事よ！」と、クウブリヤンは繰返した。

ワーシカは氣にも留めず、ベツと唾をしてから、

「なーに、俺あ何うにでもなれと思つてる！ それに……。」と言つて黙つてしまつた。

**捕**「捉まつたつて……構ふもんか——監獄ぐらい、とでも思つてるだらう。以前のこ  
とならそれもさうだが、今ぢや……。」

ワシカは片手を振つて、クウブリヤンの方へ向き直つた。

「俺あナ兄弟、」と、彼は牙えた底力のある聲で話した。「八ヶ所の工場をすっぱかして來てるんだ、だから監獄なんかビクともしねえ！　ある時俺達は亞鉛工場の方で働いてゐたつた……。おいクウブリヤ！　貴公は焦熱地獄でも見たことはあるめえが、あそこが本當の焦熱地獄だ！　息をつくことも眼をあいてることも出來やしねえ！　眼だらうが腹だらうが蝕はれてしまふ……。節々は折られてしまふ……。たゞもう寝てるだけで死んちまふんだ！　それから又紡績工場や煙草工場だつたが、そこは幾分か樂だ……。が兎に角工場に較べりや本當にどんな監獄だつて及びもつきやしねえ。」

「監獄のことなんか言つてるぢやないんだよ、馬鹿な奴だナ！」と氣むづかしくクウブリヤンが言ひ拂つた。

「ぢや何のことだ？」

「たゞかう……」

「うム？」

クウブリヤンは黙つた、それは自分の心的状態をはつきりと形容することが出來なかつたからである。

「元來俺やナ……兄弟、一年生きてゐるよりも一週間ほんとに生きればいゝツていふ考なんだ、で小さい時分からふらついでる。さうだ……。親父と一緒に初めて馬を盗み出したのが、十二の時だつたせ……。」

「さうか、おい……。偉いもんだナ！」と、ワシカが賞讃した。

「俺等の家ちや皆さうだ……。祖父からしてそれが商賣だつた。と言ふのは何うにもかうにしようがねえんだ。田地は少しで、そんなもの棄てたつて何でもない！　工場へ行く人達もあるが……。そりや厭と來るんだ！　だが空腹は承知しねえ。それで祖父の代から……。」



「そりやありがちのことだナ。」と、平氣でワーシカが合槌を打つた。

「祖父はその仕事で殺されたんだ……。兄貴もやっぱり殺されたが、俺をば手にか  
けなかつた、——からきし小さかつたので。でもうんと鞭たれたぞ！」

「さうか……。」

「だが後では、そんな奴でもシベリヤ送りになつたものが少なくねえ……。」

「よくあるなアそんなことは。」と、またワーシカは口を揃へた。

クウブリヤンは物思はしげに隙間から空を眺めてゐた。

「それは無論……。」と、また彼が語り出した。「何處にゐても同じこと詰らねえさ……。これは俺ひとりの考ちやあるめえ……。狼みたいに宿無しで……。風に嘯いてたゞそれだけと言つたやうな……。犬にも劣る生活をしてゐると、時には春の野良も戀しくならア……。地上を残らず掘りかへしてナ、どツちへふり向いても見渡す限り一面の青物といふやうにもして見てえや……。あゝ、むか／＼する！ 百姓が羨し

いナ！」

ワーシカは頭を擡げて、柔かに、然し自信ありげに言ひ出した。

「まさか、そんなこと……。出鱈目を云ふなよ。ソンならまた石や土塊を碎けといつて鋤を渡されて見い、——まッ先に逃げ出すから！」

「いや。」と、簡単にクウブリヤンは答へた。

二人共黙り込むと、またしても雨のさゞめきと樺の木のぎい／＼いふ音が聞え出した。

「なる程ナ、」と、急に、平素の元氣のよい聲に似ず、意外に悲調を帯びた聲でワーシカが口を切つた。「さうかも知れんテ……。貴公はなんだらう、あのワーシカの奴は……神に蠟燭もあげず、鬼に金火箸も呉れず、不粹な男だ！……と思つてゐるだらう。所がこれでナ、兄弟、俺は全く……いや本當に……そぢやないんだ……。これでも舊はやつぱり思をめぐらしたもんだ。……今に憶えてゐるが、春の夕暮だつ

た、外へ出ると空には鶴が啼いてる、土の香がぶん／＼小鼻をうつ……。いつしか俺は歌ひだしてゐた。あの頃はなかく／＼歌が上手だった、今でこそ酒で飲み潰してしまつたけれど、あの頃はうまく歌つたものだつたゾ。俺達の先生のイワンさんツていふ人などは、此の子を仕込めば……。なんて言つてゐた位だ。えへへ！ それから俺は人間の暮す有様をすつかり書き現はして見たかつた。夕方竹つ立たまゝ、鶴の啼く音を聴いてゐると、妙なもんだナ。何故かしらかう泣きたくなつて来るんだ……。誰かに話しても見たいが、解つてくれる人は無し、親父なんかには言はうものなら怒鳴りつけるツていふ有様だ。で……。何處へも持つて行き場がねえや。そのうちに工場へ行つたが最後、すつかり悪心にとツ憑かれてしまつた！ 大酒を飲みだしたのもその時だ……。だが、それも過去のことだ……。何うでもいゝや！

「全くだ。」と、クウブリヤンも悲しげな聲を出した。

きり／＼と、樺の木が哀れツぽく軋つた。しばらくは物音もなくしんとしてゐた。

「エゴールは来たのか？」と、突然クウブリヤンが問ひかけた。

ワシカは、ついと起ち上つて又坐つた。

「来た。」と、彼は言つた。

「貴公は見たのか？」

「おう、直接にお目にかゝつた。大きな野郎で勳章も幾つかもつてゐた。毘は如何にも兵隊らしくちやんとかう……。」

「疾うに来たのか？」と、クウブリヤンは口籠るやうな訊き方をした。

彼は、エゴールが勳章を持つてゐると聞いた時、ぐつと不愉快になつた。然しこれが嫉妬であるとは彼も氣がつかなかつた、それで自分ながらも此の感情に愕いた。

「たしか昨日だ……」

「で、何うだつた？」

「何うツて事は無え……。聞いた話だが、遣つて來ると、停車場で書記が出迎へたとさ。先づ兎も角も一杯飲んで、さて飲むと書記が一部始終を彼奴きやつにぶちまけたもんだ……。赤ん坊がとか何とか、まア洗ひ浚ひすっかり話したんだらう……。すると彼奴きやつ最初は氣絶したやうにつつ伏してゐたつていふことだが、後では飲み出してナ、酔漢とも狂人ともつかねえ恰好で村へ歸つた。そして歸るが早いか女を毆つた。殺さなけりやいゝがツて皆氣遣つてゐたとよ……。」

「モジャーウイからも聞いた。」と、クウブリヤンは嘔れ聲を洩らした。「今林の中で逢つて來たんだ。」

「モジャーウイに？……。」

「だが、あの女もまづいことになつたナ！」

「全くだ！ 俺はエゴールを知つてゐるが……それは亂暴な人間だ。殺すのは、よし

殺さないにしても、あの女が酷い目に逢ふことは慥かだ……。それでなんだ……。自分自分のしたことが思ひ知れらア！」

「そりやア言ふな。」

「どうして？」

「貴公は（自分のしたこと）ツて言つてゐるがナ、兄弟、馬を盗むにしても同じ事だぞ。自分で行つたらう、誰も尻押しをしやあしなかつたらう、でも兎に角……。何しろ女が可哀相だ。」

ワシカはくすくすと笑つた。

「可哀相とは恐入つた！ まア彼奴が女を片輪にするとしても大した事はねえ、いやそれもしやアすめえ。何しろ彼奴にとつてはあの女が入用なんだから。いまに見ろあの女もまだ半「ダース」位は生み出す！ きまつたことだ……。」

「ひ弱い女だぞ……。打擲に耐へまい。」

ワシカは片手を振つて、乾草の中から壘をとり出した。

「耐へなけりや死ぬ。これはもう確かだ。」と、哲學的に結論して、彼は酒をあふつた。

然しクウブリヤンは續けた。

「女が可哀相だ、小兒が可哀相だ。何しろまだ何の考もない。」  
ワシカは一寸考へ込んだ。

「それは全くだ。」と、彼は頭を振つた。「その子の生活は碌な事にやならぬ、だからまア棺桶の中へ片つけてしまふんだ。女は片輪にされようが、されまいが、小兒は樂にしてやるがいゝ！　ちエ！……どうせその子は眼の玉の白いうちは彼奴と女の恥辱しになるだけだ……。路はもうちやんと其處へ行つとる。」

「だが何故さうするんだ？」と、クウブリヤンは壁の隙間から風に揺れる樺の木の影響を眺めながら、幽かに訊いた。

「何故とは？　何のことを言つてるんだ？」ワシカには解らなかつた。

「小兒を何故さうするかつて言ふのよウ！　小兒に罪はなからう？」

「ちエ！　こんなことが兄弟分らねえのか、おい、小兒に罪だと？　何言つてるんだ！　道ならぬ子ぢやねえか、だから家へ寄せつけないで、もと来た所へ遣つちまへてのよ。全くだ。何も氣の毒がることはねえや、その子にした所がさう喜びやしねえぞ！　たかゞ百姓の子で……。」

「でも可哀相だ。」と、クウブリヤンは獨語のやうに繰返した。

ワシカは此の話には退屈してしまつた。彼の心は、人間を單に巨大な機械の一部としてしまふ工場製造場のために、ひどく又變に銷磨されてゐたので、同情感などいふものはもう全然受けなかつた。彼は赤子を人間とは思はなかつた。ワシカは屋根裏の埃だらけの微びた暗い空所を（その棒の上では一羽の鳥みたいなものもちゝしてゐた、その空所を）一寸見てから、長たらしく又意味ありげに唾を

吐いて、それから眠入ってしまった。

クウブリヤンは、しかし長い間乾草の上で轉々してゐた。濡れた着物が肩に纏はりつくのも工合が悪かつた、また色々な考へが込みあげて来るのも氣持がよくなかつた。その考のうちで首座を占めてゐたのは、何もかも押しつけてしまふ孤獨感と、彼の前に不明な怖ろしい問題としてもち上つた生活そのものを、何とか解釋しようとする痛切な希望から来る重い暗い困憊とであつた。

それでも外套が乾草の中で温まると共に、草臥れきつたクウブリヤンはだん／＼眠に落ちた。

灰色の朝が廣い隙間から這入つてくると、一郡切つての兇猛なる馬盗人の寝姿が二つ、埃つばい乳色の光に照らし出された。

クウブリヤンは仰向けにのび／＼と眠つてゐた。そして髯の黒い、頬骨の高い、肉の緊つた顔は如何にも百姓らしく嚴然泰然としてゐた。彼は大きく胸部を働かせ

ながら重々しく平に呼吸してゐた。

ワシカは猫のやうに圓くなつて、破れたツボンをつけた瘦せた長い足を縮めて頭の下に片手をかひ込んで、眠つてゐた。その頸背も口瓮も無い瘦せこけた顔は、死人のやうに動かなかつた、それが淡い曙光を受けて土色に見えた。彼は呼吸のしかたが不同で、鼻がすこ／＼したり、喉がごろ／＼言つてゐた。細い頸は伸び、臉は丁度、何時如何なる瞬間に於いても跳ね起きて駆け出すことの出来る人のやうに、軽く微動してゐた。

村の方では鶏が風邪をひいたやうな嘎れた聲で歌つてゐた。一方、小屋の後には、折れた枯蘆で蔽はれてゐる沼地があつて、その亦彼方に愁はしげな灰色の、濡れた畑が續いてゐた。その空には灰色の重い密雲が漂つて、淡い雨の幕がしよ／＼と降りてゐた。

## 三

ワシカがクウブリヤンに話したことは嘘だった。エゴール・シパーエフは家へ歸るまで何も知らなかつた。

兵役の五年間エゴール・シパーエフは全然妻から離れてゐたけれど、それでも田舎に妻のあることは辨へてゐた。だから身は兵士の誰でもがするやうに他の婦人や女中や賣春婦と一緒に暮らしてはゐたものゝ、自分としては妻に對する己が権利の確實性をかたく信じてゐた。で、妻が《巫山戯る》かしのぬといふやうな願慮は、極めて稀にしかその念頭に浮ばなかつた。また、彼は肩章勳章に關聯した事だが、都會的の光彩に狎れば狎れるだけ、そして自分に對する尊敬を思へば思ふだけ、その妻が彼を賤しい百姓に換へやうなどとは何うしても思へなかつた。

妻のことを想ひ起すと、彼はいつも不愉快でなら無つた。それは彼が妻を愛して

ゐたからではない、妻や家を持つてゐるので自分を一層堅氣に感じたからである。他人と妻のことを話すには常に半ば輕蔑するやうな調子で、《女なんて、しれたものサ！》と言つた。然し偶には、殊に下士になつてからは、《家内が》と名づけるやうになつた。彼は妻に手紙を書くのが好きで、毎月一本は手づから書いた。手紙には一杯村の者への挨拶を書き、最後には《何々聯隊、何々大隊、第何中隊下士エゴール・イワノフ・シパーエフ。》と署名するのであつた。

彼は家へ來る時態と妻に手紙を書かなかつた。それは自分の下士姿の不意の光彩で以て妻をも全村をも餘計驚かさうといふのであつた。

都會に兵役を勤めてゐる間彼は全く自分の郷里を忘れてゐて、そこへ心をひかれたことはなかつた。けれども汽車が進んで、朽ちた肥料の小山があつたり、黒い小鶉が畦を歩いてゐる、勤すんだ耕地の上を走つてゐた時には、道に心持の好い嬉しいやうな蘇るやうな感じがその胸に込みあげて來るのであつた。それで彼はまる數

時間も汽車の窓から果しない灰色の平野を眺めてゐた。其處には灰色の雨の幕がかつて、塊平線の所へ行くと、同じ灰色の空と融け合つてゐた。

田舎者の彼の頭と胸では解き兼ねる無意味な軍隊生活から、その心に受けた一切の汚い厭はしい馬鹿々々しいものは、一時に消え失せて、その場所は最初、長い不在の後、郷里へ近づきつゝある人間の無暗に嬉しい氣分に譲られた、が後にはそれも去つて、(兵營に居る間に彼の身についた巨額の卑劣と放蕩と怠惰とがあるにも拘はらず)彼のうちに眼醒めた百姓・主人としての仕事の考察が座を占めた。

彼は何も無い裸の地へ行くのではない、一切の家具もあり、亦妻もある家へ行くのだ、かう思ふと、彼は故郷へ近づくにつれて愉快になつた。が、彼は此の妻といふものをほんとに家具と區別してゐなかつた。だから妻がどんな風に自分を迎へてくれるかなどといふことは、てんで念頭にも浮ばなかつた。

歸郷と結びつけて彼が胸に描いてゐたことは、村人の驚異と、彼等の珍らしさう

な罵り合ひと、自分の自慢話と、も一つは酒であつた。

何よりも痛快だつたのは、それは五年以前に、環境の不明と恐怖とからぼんやりしてゐる山羊でも渡すやうに、彼を徴兵に引渡した村長や書記やその他、村の有力者が、今では彼を同輩として迎へる筈だ、(何故ならば彼は下士である、勳功をたてた人である——)といふ一事であつた。

デルノーウエ村から十露里の所に在る停車場で汽車から降りると、エゴール・シパーエフは、もうすつかりわが家へ歸つたやうな氣持がした。で、その場に突立つて氣取つた偉さうな恰好をした。

それがまた巧く出来たので嬉しかつた。襪襦や灰色や汚い着物の百姓共の中に、彼は頭領の風采を持つてゐるのが嬉しかつた。

百姓共の間には彼の知己も見えて來た、そして其の中に書記と村長もまじつてゐた。

書記のイサーエフは矢張髪の毛の縮れた、美しい、然し脂ぎつた男で、小さな落着きのない眼と息切れの持主で、烏打帽と外套と光澤のある護謨製の套靴イラメア・シューを身に着けてゐた。

村長のゴロフチェンコは中年の、背の高い、大變猫脊の百姓で、剪んだ髪の毛が括弧形に低い額の上に垂れてゐた。彼は五年前と少しも變つてゐなかつた、そして矢張りばかんとしたり、鼻を鳴らしたりした。

彼等と一緒にもう一人デルノウオエ村の百姓がゐた。胸には百人頭の延金をつけ、手に長い杖をもつて、嚴しい氣六ヶ敷い顔をしてゐた。エゴール・シバーエフは彼を知つてゐた。此の人は腕力のある大酒家で名をシブルーンと呼んだ。

同村の者共は直ちにエゴール・シバーエフをそれと知つた。書記は彼を見ると、強ひてにこくししながら、紳士のやうに握手して彼と挨拶した。

村長は烏打帽を脱つて、三度彼と接吻し合つた。百人頭のシブルーンは朝子を持

揚げたが寄つて來ようとはしなかつた。エゴール・シバーエフは少年の頃にも青年の頃にも屢々酔拂つたシブルーンに殴られた好みはあつたけれど、此の身分で賤しい百姓と挨拶するのは妥當でないと思つて、彼の方へ寄つて行かなかつた。

「何うして今日はこちらに？」と、シバーエフは書記に訊いた。

「一寸用事があつてネ。だが君はもうすつかり此の本土へ？」

「え、」

「さうですか？ ピーテルから來ては嘘何も彼も詰らないでせうネ？」

エゴールは意味ありげな容子をした。

「え、それは無論さうです。あつちらは都、こちらは無論田舎ですから。」と、彼は謙遜に答へた。

「それはまア何うでもいゝさ。」と、まるで悲しむものゝやうに重く言ひ拂つて、村長はほつと溜息をついた。



「でも、家へ来たのは嬉しいもんでせう？」と、物好きにも、眼玉をきよろつかせながら書記が訊いた。

「それは慣らはしですからな。とにかく兵隊ならば、たとひ下士にした所で矢張軍人で、——言ひ草にもある通り薪一つ軒一つ持つてはゐませんよ。だが、かうして歸つて来れば……家、邸……一と通りは整然としてゐますから。」

「奥さんも健在ですよ。」と、書記が傳へた。

彼は餘程妻の變節をエゴール・シバーエフに傳へてやらうかと思つた。然し何うも決意し兼ねた。

「お蔭で……妻にも會へるといふもんです。」と、氣取つて而も言ひ聞かせるやうにエゴールが續けた。「兵隊のうちは無論……色々な何と戯れるやうなこともありましてよ……。だが、かうして歸つて見れば矢張り何と言つても本當の妻ですな。」

「それは勿論です！」と、眼玉をきよろつかせながら、言ひたいことも言ひ兼ねて、

書記はたゞ同意してしまつた。

村長は溜息をついて、ぼかんとしてゐた。

「客もよいがやッぱり家はよい、といふ一語に歸するかネ！」と、書記は洒落を言つて置いて、息を切りながら簡単に笑つた。

エゴール・シバーエフは嬉しさうに、にっこりした。

「そう言つてしまへば、もう言ふ所はない！」

「時にあなた方は何時デルノーウォエから出かけたんですか？」と、彼が訊いた。

「昨日でした。」

「何事です一體？」

「實はとんでもない事件が出来したんです……馬泥が始まつたんです村に……。驛長さんの所で盗まれた馬なんか……。それは良い馬でした。……所で嫌疑はデルノーウォエの者らしいといふんです。」

「それで？」エゴール・シバーエフは訊いた。そして書記が此の様な事件——普通の百姓には話しかけもしないであるやうな事件にも、彼を推挙するといふことを非常に満足に思つた。

「でネ、」と、書記は溜息をついた。「あ、貴方はクウブリャン・テューソフツて男を覚えてゐるでせう……。ほら、まだ貴方のゐるうちに監獄へ曳張られた男？」

書記は一寸考へて見た。そしてエゴールにその妻のことは、きっぱり話さない事と決めて、息を切らしながら言ひ續けた。

「で例の通り逃げてしまつたんですが、どうもあの男の遣り口だと言ふことです。」

「それは良い種の馬でしたか。」と、<sup>くちばし</sup>喙を容れて、村長は重く溜息をついた。自分の三頭の馬を氣遣つたからである。

「それはそうと……これから私は何でデルノーウ・エまで行つたらいいでせうか？」

書記は太い指を搖がして考へた。

「いや此所にはその男が一人ゐますよ。モジャーウイと呼ばれてゐますが、これも覚えてはゐませんか。その男が間もなく歸つて来る筈です。驛長のトゥエルドフレーポフさんの所へ粉を運んで行つたそうですから……。」

エゴール・シバーエフは領いて見せた、然し此の驛長といふ人は全く知らなかつた。けれど何故かしら驛長を知らなくては彼の下士としての、また都會人としての品位を損ふといふ風に思はれた。

「で、つまりその人の所へ粉を持つて行つたのですから……。今は歸つてゐるでせう。貴方はその男に頼めばいいのです。別になんとも無い男です。いゝ百姓です。」

「だが何處でその男に逢へるでせう？」

「あ、一寸待つて下さい……。シブルーン、おいシブルーン！」と、書記は百人頭に叫んだ。彼は會話の始から役人に對する敬意を表して、脇へ離れてゐたのだつた。

「お前ネ……あちらへ行つてモジャーウイをさがして、一寸訊いて呉れないか、——此の方を車にのせて貰へまいかッて？……これは貴方のトランクですか？」  
「ええ私のです。」

「では此の方とトランクと。私が頼むのだと言つてお呉れ。」

百人頭はくすんだ顔付をして踵を返した、そして大分自方のありそうな靴を踏みしめながら、又杖で音を立てながら行つてしまつた。

書記はその後姿を見送つてゐた。

「あれでなか／＼……親切なだけけれど、たゞ酒に眼が無いのでネ。」

「さうした人もあるんです。」と、エゴール・シバーエフが言つた。

書記が彼の前で他の百姓達のことをいろ／＼と風評して、彼シバーエフをこれ等の百姓達に加へないやうに、見へるのが彼にはほく／＼嬉しかつた。

が、少時経つと、彼は自分の品位を維持しなければならぬと思つて、口髭を左右

へ撫でながら、かう言つた。

「私の第三中隊にも矢張さうした兵が一人ゐましたよ、ジプシイの出身でペロコブイ・ティンといふ苗字でしたが、此の兵が丁度さうで、白面ならばよく言ふことを聴くのですけれど、一旦飲むと、もう何うにもかうにもならぬやくざ者になつてしまふので……。でも矢張りよく氣のつく男で、なすべき事はちやんと型の通りやつてのける兵でしたよ……。」

「よくあるもんですナ。」と、今度は書記が合槌を打つた。

此の時村長が咳をして口を開けた。

ブラットフォームには百人頭のシブルーンが、例の杖を持ち延金を光らせて、姿を現はした。それに續いて、襤褸々々になつた鞆鞆流の外套を着て、踏み潰された草鞋を履いたモジャーウイが出て來た。

「これが。」と、百人頭は言つて、吃逆を一つすると、役人に敬意を表する意味で、

わきへ離れた。

モジャーウイは急いで帽子を取った。そして彼等から三步の所に立止まると、趾を揃へて細い黒い頸を延ばした。彼はまるで打ちのめされた動物のやうな恰好をして、涙含んだ眼を役人等に注いでゐた。それは何故かといふに、シブルーンが役人の用向きを彼によく言つてきかせなかつたため、彼はこれまでの経験と根強い習性によつて、自然と役人からは碌でもない事を期待してゐたからであつた。書記は即座に官僚的な役人と變つてしまつた。

「おい、お前は此の方を一つデルノークエへのせて行くのだ。すぐだぞ？」

「は、すぐ。」と、慌て、聲を囁らして、まるでやツと咽喉から言葉が出て來たやうに、モジャーウイは答へた。

「そこに此の方のトランクが……。あ、それ。」

モジャーウイはトランクを眺めて眼を瞬いた。といふのは、トランクが可也大きか

つたばかりではない、彼の馬がやくざで、而も今日はまる一日食をやらなかつたからである。モジャーウイは自分の馬が惜しかつたけれど、書記の命には背き兼ねた。それぐらいではない、彼は待つてゐましたと言はぬばかりの素振まで見せて、甲斐々々しく動き出した。先づ帽子を腰に挟み、細くて痘痕のある雙方の手でトランクを抱へたが、それでもやツとのことで持上げるだけの事しか出来なかつた。彼はなほ一層勵みを出して、帽子は腋下の方へ廻して、更にトランクへ縋りついた。

「シブルーンはあり／＼と輕蔑の色を浮べてこれを見てゐたが、  
「どれ。」

と言つてモジャーウイを突きおけると、何の苦もなくトランクをとつて持去つてしまつた。モジャーウイは骨張つた肩胛骨の運動によつて背中を掻きながら、同時に鼻で以て咽び泣くやうな音を出しながら、その後につゞいた。

「これで先づ、」と、書記が言つた。「あの男が貴方を送るといふ譯です。」

「ではこれで失敬します。」と、エゴール・シバーエフが言つた。「いや大きに有難うございました。」

「どう致しまして。」と、書記が言ひかへした。「私はいつも悦んで相當の方には何なりと……。では何れまた。奥さんによろしく。」

「いや有難う。左様なら。」

「左様なら。」

村長はまた何も言はずに、溜息をほつとついで、不恰好に自分の乾枯らびた指を曲げもせず、シバーエフの手を揺ぶつた。

## 四

モジャーウイは自分の荷馬車の側に立つて待つてゐた。馬車の上には最早トランクが積んであつた。

二人が乗ると、腹の脹れた、毛色の悪い小馬が懶げな脚取で出かけた。

最初は傍に幾條かの鐵道線路や、山のやうに積まれた朽ちた枕木や錆びたレーグや、きりもなく長い貨物列車や、さては又それ等の間をしゆうく言ひながら後へ前へ活動して緩衝器を烈しく敲きつけてゐる機關車などが、しばらく見え續いてゐた。程なくそれ等の線路は數少なく、寂しくなつて、纏て一線の平滑な帯のやうに合してしまふと、あとは地平線へ向つて遠く走つて行つた。さて左右を眺むれば、またしても何も無い裸の黒土や赭土の畑が展開されて、その耕された所には矢張り小鴉が遊んで居り、畦には枯れた一葉蓬が物哀れに揺いでゐた。

モジャーウイは瘦せた肩胛骨をぐつと突き出したまゝ、うつむいて坐つてゐた。そして時々繩製の手綱で馬の頭を曳きながら、軽く舌を鳴してゐた。馬は毛の少ない尾を振つては、耳をピコつかせた。

かうなると、エゴール・シバーエフの心は又もひろくとした嬉しい感じに包ま

れるのであつた。

空の密雲は所々切れかゝつて、廣い平野の面をば、仄かな過ぎ易い太陽の光が走つた。そして腹の脹れた馬の、毛の抜けた背と、モジャーウイの破れた外套の上とを迂る時に、それ等をばツと黄金色に染めた。

モジャーウイは細い涙ぐんだ眼をあげて、その光を迎へた、そして瘦せこけた肩胛骨を動かした。エゴールは益々いゝ氣持になり、嬉しい氣分になつて、人と話がしなくなつた。

「爺やヨ、お前私を見ても分るまいな？」と、彼は問ひかけた。

モジャーウイは、つと彼を顧みて、急いで答へた。

「分つたとも……。」

それから一寸黙つてゐたが、突然前の調子で以て彼は全く次のやうな考に傾されてゐるらしいと附加へた。

「俺や、どうせ鞭打たれるだ。」

エゴール・シパーエフはその供述のあまりに唐突だんぱつなので、また一つには、こんな年とつたみじめな百姓を鞭打つことがあるかしらといふ疑念のために、驚かざるを得なかつた。

「何故？」と、彼は訊いた。

「林の木を、詰り……官林のその……。」

シパーエフは、此の際官吏として何か言つてきかせなければならぬと思つて、嚴格な容子をして言つた。

「どうしてお前、そんな事を？……。」

モジャーウイは、くると彼の方へ向き直つた。そして俄かに憤怒の色を浮べて両手や肩や、頭や細い頸などで身振り手真似をしながら、口舌ばかりでとはなく何だか全身を以て話し始めた。

「そりやアお前様、何うにも致し方はねえだ……。田地は無いし、あるにしても皆粘土ねつちでな……。所が俺の所にや口の数が六つとあるんだ。全くの話だ……。堪たまつたもんぢやねえ……。で今となつてはもう打たれるのだ！ 何も悪戯にした譯でもねえに。何しろ口の数が六つとあつて見れば、な、お前様、ちつとは考へて貰ひてえ……。家——なんて本當に可笑なもんだ。今日といふ日にそれを支へなけりや、明日といふ日には、こちらがそれに押潰されてしまふ。堪たまつたもんぢやねえ。俺が兄弟なども矢張りそんなことで人にやアよくは言はれねえが……。」

「そんなことでお前打たれると思ふのか？」

モジャーウイはまた全身が動きはじめた。

「可愛いゝもののためだ……。堪たまつたもんぢやねえが！ まあ打たれるといふことだけは慥だ。書記は何とも話さなかつたかな？」

「うん。」

「あゝ打たれるのか！」と、全然決めこんで、そして歎くが如くモジャーウイは繰返した。

と思ふと、突然、

「なに、俺あ何うにでもなれと思つてる。」と、大きなことを言つた。

エゴール・シパーエフは品位を保ちつゝ言つた。

「だが恥辱しぢやないか？……いゝ年をして……。」

モジャーウイはきよとく四邊を見廻して、さも不安さうに、前よりも激しく體をもじくさせた。

「俺には何でもない。俺が奴等にそんなことをさせるのぢやあるまいし。構ふもんか、打たば打て、可愛いゝものゝためだ……。もう打たれたこともある身だ……。」

「打たれた事があるのか？」

「知れた事さ。」と、モジャーウイは肩を聳やかした。「可愛いゝものゝために打たれ

たのだよ。今でも背に縞が出来てゐる……。うんとやられたで……。」

「恥しくはないのか？」大都會に行つてゐて、こんな亂暴な厭はしいことには疎くなつたエゴール・シバーエフは、珍らしさうにかう言つて訊いた。

モジャーウイは腰を曲げて黙り込んだが、馬に舌打ちをすると、またいやげに答へた。

「いや……。最初襯衣をまくりあげらるゝ時は随分恥しかったが、あとでは何ともねえ……。恥しいも何もあつたもんぢやねえ……。」

モジャーウイは不満さうに肩胛骨をつツ張つて口を噤んだ。

エゴール・シバーエフはその背中を眺めてゐたが、ふと譯の解らぬ笑を洩らした。どうも妙に思へる事があつたからである。それは、モジャーウイが彼を鞭打つた者の行爲を一層恥づべきことのやうに見做して、自分の恥辱をばその次に立てたことである。もう一つは、都會にある時随分酷い穢ららしい犯罪をした悪人を澤山目撃した。

だが、彼等はそれがために監獄や苦役には遣られても、此の白髪頭の貧弱な百姓見たいに打たれはしなかつた。

それから、シバーエフは少時の間自分の思想を一點に集中することが出来なかつた。

こんもりした岡の蔭から棒のやうなものが何本も顔を出して、その直ぐ向ふに水車場の翼が突立つたが、そのうちに屋根に青い苔の生えた黝すんだ、水車場そのものが見え出した。するとそのあとからもう一つ、また一つと、到頭十まで現はれた。疑と動かずに立つてゐるのもあれば、エゴール・シバーエフの耳まで届く程の微かな軋りをたてゝ廻轉してゐるのもあつた。

「デルノーウオエだ。」と、モジャーウイが言つた。

然しシバーエフは、幼い頃から見慣れてゐた所は、人に言はれなくも、直ぐそれと解つた、すると幸福な感情が胸にこみあげて来て、思はず涙が眼にたまるのであ



つた。

ペトログラードと、これに附随した喧噪や、退屈で苦痛な兵營生活や、下らない虚禮や教練などは忽ち霧に没するやうに消え失せて、その場所へは實際にデルノーウエ村が復活してゐた。その白い教會堂、壊れかゝつた柵、黒い菜園の猫柳、さては又遠くから望めば腐つた堆肥に似た百姓家、その裂けかゝつた灰色の屋根などが皆蘇つて來た。

すると、エゴール・シバーエフは急に妻のことを想ひ起した、而もその想ひ起し方は以前のそれとは全く違つたものであつた。彼は何うかして彼女に良い印象を與へたいと思つた。エゴール・シバーエフは元氣づいた、それがため心臓は高鳴り、足は顫え出すといふ始末であつた。

路のそばには柴垣と燻つた窓の百姓家とが續いてゐた。賤しい女達や百姓共が迎へてくれ始めた。彼等は立止まつて彼を眺め、少時の間見送つてからそれ／＼仕事

についた。鶏共は驚きの聲をあげながら路をあげた。一匹の毛むくじやらかな小犬が毯の様に馬車の後を追ひかけて來たが、豚を見つけると其の方へとびかゝつた。

エゴール・シバーエフは何をも彼をも嬉しい眸で眺めた。そして、何處かに妻はゐないかしらと思つて、絶えずモジャウイの頭と馬の首木の上から向ふを見てゐた。太陽が鳥渡覗いて、鮮かな光を村に浴せかけると、汚い藁や濡れた屋根は金色になり、遙か彼方に見ゆる新しい、しやれた郡役所の看板がびか／＼と光つた。

## 五

彼はもう遠くから自分の家に眼をつけた。そして、その自分の家をば、他の家々に似てゐない全く特別なものゝ様に思つた。その埃だらけの、何時塗りかへたか分からぬやうな壁も、舊くさい柴垣も、青い苔に蔽はれてゐる正體を失つた屋根も、何も彼も——塀にとまつてゐる鳥までもが、五年以前のそのまゝで（とは言へその頃

はこれ等一切のものを吟味しようなどは思ひもつかなかつたが、何だかその當時のまゝでゝあるやうに思はれた。

と同時に彼は一刻も早く妻を見たいといふ堪らない齒痒さを感じた。それで、彼は今迄もたゞ妻を見たいと思つてゐたのだ、常に彼女のことばかり考へてゐたのだといふやうな氣がして來た。

家のすぐ側を乗行きながら、彼は嬉しさうに、面も少々極り悪さうにその小ぼけな汚い窓を覗き込んだ。然し布の栓がしてある緑色の瓶か何かの外には何物をも見出さなかつた。

「どー……。」と、モジャーウイは細い聲を出して、手綱を緊めた。それは大抵の馭者が驛馬で客を送届けた時する型の通りであつた。

毛並の亂れた馬は至つて柔順に立止つた。そして、脚を擴げると、ヒツ込んだ肋骨と脹れた腹とを高く擡げて、深い溜息をついた。

「何うした、此のくたばり損ひめ……。」と、モジャーウイは呟いた。それは疲れきつた馬が可哀相であつたからである。で、彼も亦その馬と同様の深い長い柔順な溜息をついた。

エゴール・シパーエフはひどく凝つた足を揉みながら、元氣よく馬車の中から跳び出した。そして何の苦もなく自分のトランクを取ると、そのまゝ耳門の方へ歩いて行つた。

「爺や、御苦勞だつた。」と、彼はモジャーウイにぞんざいな口を利いた。

モジャーウイは彼の後姿を見てゐたが、また溜息を吐くと、もうのこゝろ馬を進めた。

馬は頭を振りながら元氣よく家の方へ行つた。剩へ毛の薄い汚い尻尾を廻して見るのであつた。

「何うした、くたばり損ひめ……。」と繰返して、モジャーウイも元氣づいた。

彼は鞭を振りながら、金が溜つたら秋のうちにも新しい馬を一頭買はうといふことに就いて空想をつゞけてゐた。とは言へ、金の出口のないことや、到底新しい馬の買へないこと位はちやんと知つてゐた。

然し彼は此のことを生涯空想してゐた。

エゴール・シバーエフは耳門を開けた。すると錆びた蝶番が彼を徴兵に送り出した時のそれと丁度同じやうな懶い長めいた金切聲を出して廻つた。

エゴール・シバーエフは忽ちあたりの見馴れた模様にも身を顛はした。

内庭は何となく居心地のよい、温いものゝやうに思はれた。その埃だらけの草で蔽はれてゐる庭の周囲には矢張あの儘の物置が並んでゐた。草の上には踏まれて出来た凸凹だらけの粗末な小徑が走つてゐた。また物置の傍には堆肥が出来てゐて、その上には二羽の牝鶏と一羽の喧聲の雄鶏とが餌を漁つてゐた。一つしか段々の無い古い低い而も小屋根のついた出入口もその儘であつた。また其處の庇の下には乾

からびた玉葉の葉の束が轉つてゐたり、折れた杖が突出てゐたりした。

エゴール・シバーエフが耳門から登り段へやつて来る時、窓に誰かの顔がちらりと見えたが、すぐ隠れてしまつた。それからもう一つの顔も鳥渡覗いた。エゴールはそれは妻の顔だと思つたが、それも亦隠れてしまつた。然し彼を迎へには誰も出て來なかつた。で、玄關の扉は鎖されたまゝになつてゐた。

エゴール・シバーエフは出入口に上つて、片脇に自分のトランクを置いた。それは充分敬意を拂つて家の中へ這入らうと思つたからである。そして扉に手をかける時、その扉が内から開いて、赤い着物を着た何處かの跣足の女の子が、變な聲を立てながら、彼の傍をくぐり抜けて、ばたばたと一つ二つ跣足の音を立てたかと思ふと、忽ち耳門の外へ消えてしまつた。

エゴール・シバーエフは訝しさうにその後を見送つて、さて扉を開けて、頭を下げながら家の中に這入つた。

そこは綺麗に片附けられて、パンや吸物や濕つた把稿たはしなどの香がした。寝煖爐の上には更紗の桃色の枕が置いてあつた。それが第一番に彼の眼に沁みだ。それから妻をも見出した。

瘦形で背の高い、歳は二十五だけれど、瘦せてるためにもつとふけて見える、そして町人の妻や商家の女房の着るやうに下町風に着物は着てゐるが、不恰好で見映えのしない、そのマトリョーナは片手を机の上に置き、他の片手は膝にのせて、机の所に坐つてゐた。

エゴール・シバーエフは胸を躍らしながら嬉しさうに莞爾にっこりと笑つた。彼はその妻を全く別様に想像して來たのであつたけれど、この様子を見ると直ぐ氣に入つてしまつた。彼女の都會風の身装みなりも彼を快く打つた。何となれば、普通に着物を着てゐる妻では、下士としての彼に釣合はないと思つたからである。

だが、妻が起ちあがつて彼を迎へない一事はいたく彼を驚かした。

エゴール・シバーエフが這入つた時、彼女はちらりと彼に視線を投げかけたが、すぐ目を伏せて蒼靄蒼蒼めた。

「今歸つたよ。」

エゴール・シバーエフはもう何だか愚圖々々と言つてしまつた。

マトリョーナは黙つたまゝ起ち上つて、彼に恭しくお辭儀をした。

此の無言の挨拶によつて、また妻が彼を見ないといふことによつて、エゴール・シバーエフは直ちにあのことが實現したのだと認め、彼が一度も眞面目に考へたことのなかつたことが、然しその可能に就いては知つてゐたことが、こゝに實現したのだと認め、

彼は惑つた。

「唯今歸りましたよ。」と、彼は重ねて謔あざわらいた。

マトリョーナは薄い、血の氣のない唇を顫はして、また黙つたまゝ恭しくお辭儀を

した、而も今度は片手を床につけてお辭儀をした。

此の二度目のお辭儀のために、シバーエフの胸の中で何かしら潰れて、それが彼の顔に飛んで来た。で彼は忽ち眞赤になつてしまった。

「いや、さうだらう。」と、彼は太い聲を出した。

マトリョーナは顔を揚げずに、上眼をつかつて彼にちらりと視線を投げた。

エゴール・シバーエフは愚圖々々と、然し狼狽へながら三步進んで行つて、腰掛に坐した。

彼の頭の中は不意をくらつて何も彼も混乱してしまつた。で彼は馬鹿のやうになり、何か考へようとしても殆んど考へられなかつた。

「さうだらうヨ……。」と繰返して、彼は帽子を机の上へのせた。

この時彼は今迄氣のつかなくなつたものを發見した。それはマトリョーナの背後に立つて彼女のスカアトに縋つてゐる三歳位の小兒であつた。汚い青い着物をきて、

跣足で、何か擦りつけた汚い顔をしてゐた。髪の毛も白つぽく、眼も白つぽかつた。

その小兒は口に指を差込んで、兩の頬べたを脹らしながら、極めて冷淡にエゴールと彼の帽子とを覗めてゐた。

一分位は、エゴール・シバーエフも口を開き眼を睜つたまゝ、その小兒を視てゐた。すると眼が霞んで来て、その内側が冷たくなつた。彼は猛然と拳で机を叩くと、(それで帽子が床の上に飛んだ)マトリョーナの顔の所へ及び腰になつて太い聲を出した。

「やい、貴様は何だらう……圖太い奴だー」

マトリョーナは恐怖のあまり圓くなつた眼をあげて、正面に彼を見た。そして黙つてゐた。

エゴール・シバーエフは一分時呼吸を止めてゐたが、忽ち家一杯の大聲を發した。

「やい、此の死に損ひめ！ 誰だか言へ！」

マトリコーナは怖ろしさのあまり馬鹿のやうになつて、いつまでも彼の顔をも見まもつてゐた。黙つてゐた。

けれどその代りに小兒が、眼を掩ひ指を擴げて、わツとばかりに金切聲を出して泣き始めた。

シパーエフは齒をぎり／＼鳴らしながら、その子の方へ驀進した。するとマトリコーナが機械的にひよ／＼と出て二人の間に立つた。一秒時エゴール・シパーエフは棒立ちになつた、が見る／＼血走つて來たと思ふと、俄に拳を揮つて妻の頭を毆つた。

彼女はよろ／＼と倒れかゝつたが、それでも机に縋つて立ち直つた。同時に被布が頭から肩に落ちて、ふさ／＼した髪の毛が顔の前に垂れ下つた。

一撃を興へると、エゴールはなほも憎惡の満潮を感じて、果ては息が止まつてし

まふばかりになつた。思はず彼は此の感情の出口を開いて、無我無中、きり／＼と切齒しながら、力任せに妻をひツ掴んだ。最初は手をとつたけれど、次には髪の毛を掴んで部屋の中央へ引張り出した。彼女は固く床の上に坐つて、片肘で顔を覆ふた。エゴールはぼんと足で彼女の背中を蹴飛ばすと、また髪の毛に手をかけて床の上を引張りまはした。それからひツ立て、亦抛り出した。

數分間彼は、兩足を擴げて深い息をしながら、凝と立つてゐた。その全身は眞赤に又汗みどろになり、眼は狂ひ、手は震へてゐた。

マトリコーナは床の上に坐つて、片手で男から身を衛つてゐた。

けれど、彼女がその手を卸すと、彼はまた女を殴り始めた。そして久らくの間、口の中で惡態を呟きながら、女の髪の毛をとつて家の中を引張り廻した。そして打つたり蹴つたりした。女のスカートは落ちてしまつた。それでも彼女は、髪をとられて男に引張られると、地の厚い上衣が一寸かゝてゐるだけの裸の足を運ばして、

素直について廻つた。

瀬戸物が幾つか棚から墜落した。棒のやうなものがエゴールの足の許に落ちた。すると、彼は此の棒で以て妻の背中や肩を打つのであつた。

マトリョーナは絹を裂くやうな細い聲で叫び出した。そして逃げようと思つた。けれどエゴールにうんと背中を衝きとばされたため、體全體を煖爐にたゞきつけて、床の上に倒れてしまつた。

エゴールは棒を棄て、腰掛の上にとツかりと腰を卸した。そして苦しさうに喘ぎながらすツかり落着いた。體中が眞赤になつて、汗みどろの顔には髪の毛が貼りついてゐた。

その時彼は、村人の手前永久に面目を失つたことを想ひ出した。そして名譽に對する一切の空想が根底から破壊されたと思つた。最早都風を吹かせることも出来な  
いと思つた。而もこれが皆妻のためだと思つた。

彼は頭を片肘の上に落して、彼自身もまたはツきりと意識してゐなかつた或る良  
いものまでが永久に碎かれたと感じて忍び泣いた。涙は霞のやうにその肉づきのよ  
い赤ら顔をこぼした。

マトリョーナはそツと立ち上つて、ふら／＼しながら家の中を歩いた。そして恐る  
恐る夫を見遣つてゐた。彼女の一方の目はすツかり腫れて、それがために顔全體が  
見るかげもない、怖ろしい、人間らしくないものになつた。彼女は被布フクロで髪の毛を  
包み、スカートを穿いて玄關の所へ出た。そこで彼女は襦袢に水を含ませて打傷を  
濡らし始めた。

ふと見ると、小さいフェーヂカが汚水の桶の向ふに坐つて、恐ろしさに忍び泣きを  
してゐた。マトリョーナは彼をつれ出して出入口の所へ來た。

「お前いゝ子だから往還の方へ行つておいで……。」

一方、エゴールは家の中に坐つて泣き續けてゐた。彼の一生は妻のために壊され

てしまつた。さもなければ至極良い工合になつたものと、そのことばかり考へた。彼女に對する憎惡が再び彼の胸中に沸騰し出した。

彼は泣くのを止めた。またも殺氣だつた。玄關に出ると、物をも言はず妻を殴つた。そして出来るだけ妻に痛い思をさせたいといふ焦げつくやうな希望に驅られてまたも髪の毛をとつて床の上を引張り廻した。

マトリョーナは泣かなかつた。エゴールが古い濡れた繩を見つけて來て、その繩で所構はず打ち始めた時でさへ、彼女は聲を立てなかつた。

これが當然であると思つた。だから恐怖と苦痛とを凝と憶えてゐた。彼女は、夫の心行くまで辛抱出来ないのではないか、それで夫は殺す迄彼女を殴ることになるのではないかと、たゞそればかりを氣遣つてゐた。

だがそれにも増して彼女の恐れてゐたのは、エゴールが彼女を裸體のまま、荷車にしばりつけて、街路上に引き出して、民衆の眼の前で彼女を鞭打つことはなからう

かといふ一事であつた、といふのは、これが變節した妻に施す一つの習慣であつたから。

## 六

夕方、エゴール・シバーエフはもう一度妻を殴つた。最早前よりはずつと手柔かであつたが、それでも少々氣が安まつて、この位のことにはまだ挽回のつくことだ、いや有り觸れた事だといふやうなことまで考へるやうになつた。そこで彼は家を出て居酒屋へ行つた。

マトリョーナはハンカチで片眼縛つて、庭へ出た。

よく晴れた温い晩であつた。空は全く透明で、其處には最早幽かに小さい星が閃いてゐた。邸の内部や、菜園や植込は早くも薄暗くなつて、その邊からは濕つた冷氣が湧き、濡れた肥料の香が漂ふてゐた。



マトリョーナは出入口に立つて、片目で以て塀越しに往還の方を眺めた。其處には甲走つた人聲や、門の軋音や、牛の蹄き聲などが聞かれた。

耳門が用心深い音を立て、先刻エゴールの足元に中つた其の女の子が邸の中を覗いた。彼女は健氣にも両手でフェーヂカを抱いて來た。抱いて來たと言つても、それはフェーヂカの胴腹に両手をかけて壓しつけて來たのであつた。けれど彼はそれを少しも氣にしてゐなかつた。

少女は耳門の所に立止まつて、怖る／＼マトリョーナを見てゐた。フェーヂカは母の方へ來たがつて泡を吹いてゐた。

「こつちへお出で、アニュータ。」マトリョーナが呼んだ。

少女はそつと跣足を運んだ。フェーヂカは両手をふつて泣き聲を出した。

マトリョーナはその兒を両手にとつた。

「行つて了つた？ あの人は。」と、アニュータが低聲に訊いた。

マトリョーナは手を振つて見せた。

「打つた——の？」と、少女は又低聲に節をつけて言つた。

マトリョーナは吐息をした。

「まア！」と、驚いたやうに言つて、アニュータは直ぐまた早口に饒舌りだした。「酒屋へ行つたよ、こんな怒つた顔して！ でもあの人の外套にはでかい勳章があるねえ！ クーブリヤ叔父さんに話さうか？」

マトリョーナは再び吐息をして伏目になつた。

「私話さう……話していい？」マトリョーナは頷いて見せた。「それから来るやうに言はう……。だけど何處へ來たら？……」と、こましやくくれた恰好をして、アニュータが訊いた。

マトリョーナは考へた、そして伏目になつた。

「さう、あの野菜畑へ……。裏路を來るやうに……。明日の晩……。そう言つてく

れる？」

「言ふよ、言ふよ……。マトリコーナ伯母さん私今行つて来る。怖いな……。」

「ぢや、行つて来てお呉れ……。」

「行くよ……。さう話すんだネ？」

「あゝ。」

「ぢや、話して来る。」

アニエータは踵を蹴して門の外へ駆け出した。そして懸命に足を運びながら路の上を踏んで行つた。

マトリコーナはひとりになると、夫が酔つて来てまた彼女を殴るであらうといふやうなことを考へながら、往還の方を片目で見遣つては不安さうに聴き耳をたてゝゐた。

彼女の體は痛んだ。疼いた。そして胸の中には何となく重たいものが感じられた。

彼女は唾を吐いた。が出漣つた粘液を吐ききることが出来なかつた。

フェーデカは彼女の腕から頭を外して眠入つた。

マトリコーナは静に部屋の中へ這入つて、腰掛の上に繒纒を積んで、眠つてるフェーデカを寝かしつけて、その見の落ちないやうに二本の木片をかひ込んだ。

それから彼女はまた出入口の所へ出て、段々に腰を掛けたが、その時はもう袖に顔を埋めて、いたくしくさめくと泣いてゐた。彼女はしみとく自分を不幸な者と感じた。しかしそれは彼女の體が一面の痣になる程打られたからといふのではなかつた。また、更に殴打を期待しなければならぬからといふのでもなかつた。それは全く自分の將來の生活を胸に描いて見ることが出来なかつたからである。自分の將來が何だかかう暗い怖ろしい穴のやうに思はれたからである。

彼女にとつてはクウブリヤンが一番可哀相であつた。彼のことを想ひ起すと、彼女は一層激しく、身悶えつゝ泣いた。幾度か彼女は藪地に彼の許へ走つて行かうかと

ひたつた。ほんとにそれは唯走りつくだけのことである。何となれば、彼女の考で思は、クウブリヤンは逆も夫を防禦してくれることは出来なかつた。

マトリョーナは、これからもう彼を愛する事は出来まいと思つて、さめぐくと啜泣いた。

然しどうせかうなるに違ひないといふものゝ中でも、小さなフェーヂカの運命だけは彼女によく解つてゐた。全く明瞭であつた。——つまりエゴールが彼を打つて打つて薄鈍うすのろにしてしまふのであつた……。

で、彼女にはこれが亦不可避的な、何だか正當なことのやうに思はれた。

## 七

クウブリヤンは戸口の軌る音と冷たい空氣の流れとに眼を醒ました。そして睡眠と昨夜の酒とで火照ほてつてゐる顔をひやりと打たれた。

戸外はもう明るかつたが、太陽はまだ昇らなかつた。暗い小屋の出入口はまぶしい程白い四角形に見えて、その明るい所に一人の百姓の姿が黒く描き出された。それは背の高い、髪かみの白い、肩幅の廣い男で、長い上衣と縞の股引を着てゐたが、足は跣はだかだつた。

「居るかナ？」と、彼は嗄聲で問ひかけた。

ワシカも亦髪かみの毛に乾草のついた頭を擡たげた。

「こゝにゐるよ。」と、クウブリヤンが答へた。

百姓は、光のために何も見定められないやうな様子をして、入口から一步這入つた。そしてまさぐりながら古い蜜蜂の巢を見出すと、彼はその上に腰を卸して、胸を掻きくゞ欠伸をした。

「雨漏りがしたぞ。」と彼が言つた。

その聲はまるで樽からでも出るやうな低い音で、また口髭が物を言ふ邪魔をして

みた。

ワーシカは再び頭を落した。

百姓は口を噤んで、闇に眼の馴れるのを待つてみた、が聴てクウブリャンの方へ髯を向けた。

「エゴールが来たそうだな。」と、彼が言った。

「そりやアもう聞いた。」とクウブリャンが呟いた。

百姓は黙つてみた。

「どうする積りだえ？」と、彼は毛むくじやらかな眉の下から眞面目に彼の方を見て訊いた。

「いづれ分るサ。」胸騒ぎを覚えながら、クウブリャンは言った。

「さうだ。」と、百姓も投げ出すやうに曖昧な聲を出した。

ワーシカが素早く頭を揚げた。

「今となつて考へても何にもなるめえ。」と彼が嘲るやうに言った。「抛つて置くだけのことさ！」

百姓は冷やかに彼を眺めて、はッと溜息をついたなり黙り込んでみた。クウブリャンは眼を伏せた。

「アニエータが昨日あの家へ行つてみたがなア。」と、言ひかけて、百姓はまたクウブリャンの方へ向いた。

「うん、それで？」

「さう言つてみた。お前に今日来て貰ひたい……なるだけ晚く野菜畑の所へ。これはマトリローナに吩咐けられて来たんだ……。」

クウブリャンは黙つてみた。

「よし、行かう。」と、彼は投げ出すやうに言った。

「さうか。」と言つて、百姓は立ち上つた。「麵麩はあるか。麵麩は？」と訊いた。

*The  
The*

「麩鮑はある。」と、ワーシカが答へた。「だが酒の方が竭きてしまつた……。一本寄越してくれ……。」

「瓶を出せよ。酒屋があいたら寄越すでしょう。」  
百姓は出かけた。そして其の背後に戸をしめた。

「おい、クウブリヤ。」とワーシカが話し出した。「こゝは立退たちかなけりやならぬぞ……。タラソフカへ高飛びしようか、ブザートイ(でぶの意)の所へ。」

クウブリヤンは何か言ひたいことが言ひ得ないやうに、直に返事はしなかつた。

「ぢやア……。」と彼は言つた。「明日までにも行かう……。」  
ワーシカは異んだ。

「何言つてるだい？ グニャーウイ(禿げといふ意)の話では——かたて駈立があるんだとよう。夕ゆふのうちに警視が来て。」  
クウブリヤンはまた黙つてしまつた。

「糞、勝手にしやがれ！」と、憤慨さうに手を振つて見せて寝轉んだ。

「捉つかまへられたら？……。」

「捉へるかどうか見てろよ。」と、クウブリヤンは頑強に反対した。「だが貴公も詰らねえ事に氣がついたもんだナ……。」

するとワーシカがつと坐つた。

「貴公は女のために居残る氣ちやあるめえな……。」

「いやさうかも知れん。」傍を見ながら、クウブリヤンが答へた。

ワーシカは口一杯に笑つて烏打帽を直した。

「そんなに貴公はあの女が可哀相か？」と、彼が訊いた。

「可哀相だ。」クウブリヤンはワーシカを見ないやうにしながら言ひ拂つた。

ワーシカは彼を眺めてゐたが、やがて舌打をして腹を立てた。

「可哀相、可哀相ツて……貴公は餘程情深い男だな！ 馬鹿にしてらア！ 何が一

體可哀相なんだ？ あの女が肋骨を折られたにしても、そりや世間ありふれた事だ……その位で死にやしねえ。若しまた死んだにしてもお葬ひをして、饅頭でも食つて敬意を表せばよいのだ！ 何も氣の毒がる所は無え。俺だつてあんな事になりや女を曳摺り廻すサ……。」

クウブリヤンは顔を赤くして眉を擧めた。

「何のことはねえ、貴様等は皆野獸だ！」と、彼は太い聲を出した。

「なら貴公は腐つた女だ！」と、ワーシカが茶化した。「不憫がるにも程がある……。女が途ならぬことをして逃つてるのだ、夫としては無論嬉しい事は無え……。だから懲らしめてやるんだ！ 貴公ならば大方殴らないんだらう？」

クウブリヤンは深い息をして、鼻をすうツツと鳴らした。

「殴らない！……ツツて言へよ。」ワーシカは肉迫した。

「そりやア懲らしめるかも知れねえ、がまた懲らしめないかも知れねえ……。けれ

どマトリコーナだけは何うしても可哀相だ。あんな優しい女だもの！」

「ぢや行つて慰めてやれ。」

「行くとも。」

「行け、行け。」ワーシカは擲擧つた。「他所の女なんか慰めて見い、それこそエゴールに懲らしめられるぞ。そればかりぢやねえ、まるで警視の懐へ飛び込んで行くやうなものだ……。」

「警視が何だい？ そんな警視のしやつつらへは痰を吐きかけてやらア。」クウブリヤンは荒々しく言ひ拂つた。「しようと思へば、そんな奴等は片端から……なんだ。だから貴公は五月蠅いことを言ふな……。」

ワーシカは何か言はうと思つたけれど、クウブリヤンが大分腹を立てゝゐるのを見て口を噤んだ。

彼はベツと唾をして、片手をふつて見せると、そのまゝ乾草の中へ埋まつた。

「何處へでも行くがいゝや、旋毛曲は。」と彼は呟いた。「鬼の口へでも……。」  
そして、なかく、快活なだみ聲で唄を唄ひ出した。

え——、寺の横手で

むすめに會つて……

會つて——別れたら……

他の娘と會つて

それを私はものにする！……

え——、會つて別れたら……

クウブリヤンは笑を浮べて、小首を傾げた。

ワシカは彼に胸せして、もつと元氣に唄ひ出した。

會つて——別れえ——たら！……

「どうだ、兄弟！」と、彼は吐息をした。

クウブリヤンはまた酸っぱい顔をした。

「あゝ、手風琴が無えナ！」と、ワシカは指を鳴らした。「工場の者は手風琴がなかつたら死んぢまふ！俺あなんだ、息をひき取るなら、手風琴で「永遠の紀念」を弾きながらだ！」

ワシカはわれながらその洒落に笑ひ出した。

「口調が好いゾ。」と、クウブリヤンも稱揚した。

壁の外に重い足音が聞えて來た。爺やのグニャウイが這入つた。先づ彼は前のやうに眼が闇に狎れるを待つてゐた。

「酒を持つて來たのか？」と、ワシカが問ひかけた。

「いや。」と、陰氣な聲を出して、グニャウイは毛むくぢやらの胸を搔いた。

「どうしてや？」

グニャウイは黙つてゐた。

「お前等も何だせ。」と、彼が言ひ出した。「今のうちに林の方へ出て行くがいゝせ……今書記が来ての話に、今日は巡査が来るさうだ、それから明日は署長と警視が来るさうだ。お前達を驅立てようってんだ……。」

「さうか、そりや眉唾物だゾ！」と、ワーシカは蒼くなつた。

クウブリヤンは盛めッ面をして起ち上つた。

「よし〜。」彼は言つた。「では爺や、俺達は早速村を通つて林の方へ行くだけのことだ。若しも誰かに見咎められたら、驅立を避ける所だと言つてやらア。書記にも逢ふだらう。なあに、林の驅立は晝だ、けれど俺達は晩のうちに林から抜け出して此處へ来るんだ……。捜すなら捜して見るがいゝや。」

「よからう。」と、グニャーウイはひとり口髭に笑を浮べた。

ワーシカはクウブリヤンを見て、頭をかきしな口籠つた。

「何だ貴公？」とクウブリヤンが訊いた。

「む何、俺や何でもねえ。」と、まごつきながらワーシカが言ひ返した。

「ぢや……。」

「俺や同じなら裏道に行く。」と彼が呟いた。

クウブリヤンは一寸考へてゐた。

「そんなら貴公は好きにしろ！ その方がいゝや……。」

グニャーウイは蔑むやうに咳拂ひをした。

クウブリヤンは屋根裏を捜して單身銃を引出した。長い銃身は赤くなつてゐた。

「装薬であるのか？」と、彼はグニャーウイに訊いた。

「いや。」と親爺が答へた。

クウブリヤンはまた捜した。そして火薬の入つてゐる角を擡出すと、静かに念入りに装薬し始めた。グニャーウイとワーシカは黙つて彼の手先を見てゐた。

仕事が進むと、クウブリヤンは起ち上つて、銃を肩にかけ、髪の毛を一ふり震つた。



「これならもう大丈夫だ。」と、彼は言った。

「行くかナ？」ワシカが訊いた。

「出かけるよ。沼の邊で會はう。」

二人は外へ出た。

もう晝間になつてゐた。けれど灰色の蒼褪めた日であつた。雨は止んでも、密雲が低く重たく動いてゐた。

ワシカは四邊を見廻しながら、野菜畑に沿ふて行つた。クウブリヤンとグニャーウイは庭を横切つて行つたが、やがてクウブリヤンだけ路へ出た。

「お前、なんだせ……。」と、親爺は耳門の中に立つたまゝ言つた。

「何が？」

「エゴールを用心しろ……。もうあいつは知つてしまつたせ……。」

「誰から？」とクウブリヤンは眉を擧げた。

「パラーシヤらしい、兵隊の唄のナ……。あの女の仕事だ。だからお前用心しろッて言ふんだ……。」

クウブリヤンは頭を掻いた。

「なあに、あんな野郎は沼の中へでもたゝき込んでやるさー さうびくくしちやゐないや。」と、言つて、彼は路に沿ふて行つた。

グニャーウイは垂れ下つた白毛の眉の下から小さい鋭い眼を光らして、しばらく彼の後姿を見送つてゐた。が、臆てほつと溜息を吐いて、胸を掻いて、それから樽を造る小屋の方へ向いて行つた。

クウブリヤンは口笛を吹きながら歩いてゐた。そして、郡役所で彼を見つけるやうに仕向けてやらうと思つてゐた。彼が廣場に出て、役所のすぐ側を通つてゐると、向ふから指物屋のセミョーンが遣つて来て、彼にひよつくり出會した。彼は微かにくさかつた。若い男の癖に。

「お、誰かと思つたらクウブリヤンさん。」と楽しげに歯並を見せた。

「や、今日は。」と答へて、クウブリヤンは立止まつた。

「何處の馬を捲上げに來ました？」と、セミヨーンが問ひかけた。

「貴公のは取らんよ。」と、嘲るやうにクウブリヤンは言ひ返した。

酒飲みで、懶け者で、取り柄のない此のセミヨーンの家には、村中で一番悪い一番年取つた馬が一匹あつた。

セミヨーンは笑ひだした。

「それもよからうー」と、彼が言つた。「だがお前に村長の所のを見せたいもんだ、それは實によい三頭揃ひを買込んだぞー」

「まア見てろよ。」と、クウブリヤンは冷やかに言ひ拂つたが、その時、郡役所の窓に人のどよめきを見たので先へ行つてしまつた。

彼と出會した百姓等は大概溢い顔をして、駱へ向いた。そして何やら小言を言つた。

クウブリヤンは彼等を見ては、せゝら笑つてゐたが、間もなく野原へ出てしまつた。

## 八

郡役所用の圓々と太つた馬ばかりを揃へた三頭馬車が、停車場道の林の中を抜けて、坂路を登りつめると、今度は驛地にデルノウエへ向つて走るのであつた。

馭者臺に腰掛けてゐたのは、年の頃十八歳、ほんとに圓顔の快活な、鼻の低い、唇の大きく厚い青年の馭者で、馬車の中にをさまつてゐたのは、村長のゴロフチェンコと巡査であつた。巡査といふ人は中年のづんぐりした男で、大きな髯を持ち、赤味を帯びた警官の制服を着て、劍は肩からかけてゐた。

村長は停車場で可也飲んだため、快活になつてゐた。で懐しさうに四周を見廻してゐた。その鼻は赤くなり、眼はあぶらぎ膩つてゐた。彼はいつもの酔つた時と同じく話好きの気分になつてゐた。巡査も亦酔が廻つてはゐたものゝその品位は保つてゐた。

馬車は路の窪みでがたつきながら進んでゐた。馬は東<sup>た</sup>ねあげた尻尾を振つてゐた。馱者は口を鳴らしたり、腕を揮つたり、四邊を見廻したりしてゐた。

「マクシムさん」と、馬車が山路にかゝつた時巡査が言ひ出した。「其筋の要求にも困るぢやありませんか。馬泥を早速逮捕しろ！ なんツて。私一人の警官で五十露里もある所を受持つてゐるのに、どうしてさう容易く逮捕出来ますか……。」

「なに、逮捕しませうお互に。」村長はさち自信ありげに反駁した。

「だが、一體何うしますか。時機を待つだけの事でせう！」

「逮捕出来ぬ筈はありませぬ。大丈夫出来ます……。」

「何が逮捕出来ますか、私でさへ手の降しやうが解らないでゐるのに。」と、巡査は煙つたやうに答へた。「一體私に馬泥なんかを逮捕させようといふのが間違つてゐる。一體私は、どつちかと言へば、繁華な所の方が得意なんですからな。全く何うしたものでせう？ 此の地方ときたら到る處泥坊だらけだし……。誰をつかまへて

訊問したらいゝんです？ 若し……。」

「誰を？ それは通行人を調べるんですよ！」

村長がかう言つたのは全然咄<sup>とつさ</sup>嗟の單純な智慧であつた。それは路の前方にあつて、(斜面の上にデルノーウォエ村の風車場が幾つもの眠氣に立つてゐたが、その直ぐそばを) 一人の男が銃を肩にして歩いてゐたからであつた。

「お、あれはイワンさんだな。」と、巡査も眼にとめた。

村長は見極めようとした。

「先生だよ。叔父さん」と、高い聲で馱者が繰返した。

デルノーウォエ村の教師、イワン・セミョーノウィチは莫迦に狩獵の好きな人で、洋服でなく露西亞服を着てゐた。

「やッぱりさうだ。」と、村長も諾つた。

馬車は鈴を鳴らしながら進行して、だんぐり通行人に追ひ着くのであつた。が、

巡査は面白くなりかけた前の問題に歸つた。

「諄いやうだが、全く捉へやうがないぢやありませんか。驅立をすればよいと言つても、村中の者が悉く皆、それはクウブリヤンを敵に思つてゐない者までが、彼奴を閻魔以上に怖れてゐては、驅立も何もあつたもんぢやない。」

「それはもうその通り。」と、村長も確めた。「彼奴にかゝつては誰しも手を焼いてゐるんです。といふのは、彼奴は浮浪人だから何でもないが、若しや彼奴が放火でも……。」

「それならもう。」と、巡査は憤慨して大聲を發した。「捉へてしまつたらいゝぢやありませんか。尤もさう言ふ村長さんから始めて、眞先に逃げ出すんぢや……。」

村長は腹を立てた。

「いや、かういふ二人のうちどちらが先に逃げ出すか、それは頗る疑問ですナ。巡査も、村長を怒らしてしまつたことに氣がついた。」

「それは違ひます。私はこれでも……何ですから……。同じやうに思はれぢや……。だがかういふ扱作連こそ四方八方へ逃げ散るんで……。……！」

と言ひしな、彼は指で以て馭者の背中をつゝいた。

馭者は鼻の低い圓顔をぐるツと巡査の方へふり向け、齒を出して笑ひながら言つた。

「何だと？ そんな……。」

「おい、お前は若しクウブリヤンが出て來たら逃げ出すだらうな？」と、村長が笑談を言つた。

馭者は猶も笑顔になつて、髪の毛を震つた。

「俺は逃げない……どうして。」

「彼奴が鐵砲を撃つても？」

「その位のこと……。あんなもの何でもないや！」

此の時村長は帽子を脱いで、それを宙に振りながら、  
「イワンさんぢやないかね！……」  
と、叫んだ。

通行人は見向きもしないで、一寸帽子を持揚げた。

「何處へ行つて來ました？」と、村長が訊いた。

通行人は曖昧に片手を振つて見せた。

「林へ行つたんでせうナ？いつもかうしてお出かけですか？」今度は巡査が訊いた。

馭者は面白さうに笑ひながら、頭を掻いた。そして村長の方へ向き直つた。

「叔父さん、これはクウブリヤンだよ。」

「何？」と、聞きとれないで村長は訊いた。

「クウブリヤンだよ、これは。」と、面白さうに馭者はまた言つた。

馬車はもう通行人に追着いでゐた。

「出鱈目なことを言ふな……」と、村長は何か言ひかけたのであつた。

巡査はもう蒼くなつた。

「ビス……ストルが……此邊に……。」と、彼は坐席の下を片手でまさぐりながら、  
続れた言葉で呟いた。

村長は一時に酔が醒めてしまつた。

「それ急げ。」と、彼は馭者を衝いた。

馭者は訝んだ。で馬を引止めようとしながら面白さうに訊いた。

「ぢや捉へないのかい？」

巡査はすつかり讀んでしまつた。

「マクシムさん鳥、鳥渡……。」これが若し……その……あのクウブリヤンなら本當に  
其奴ですか？」

「さうだよ。これがさうだよ。」と、確信を以て馭者が繰返した。そして後を振向き

ながら聲をかけた。

「クウブリヤン。おいクウブリヤン……。」

「何か用か？」と、クウブリヤンが問ふた。

彼はもう疾うに、車上の村長と巡査とを認めてゐた。そして初めの程は隠れようかとも思つたのであつた、けれどそのうちに何だかぎくりと胸に障るものがあつたので一と力み力んでみたくなつた。彼はたゞ一と廻りしただけで、また村の方へ歩いて行つた。

馭者は口一杯に笑つた。

「お前を尋ねてゐる所だ！」と傳へて、彼は全く馬を止めてしまつた。

「さうか、俺は亦貴公等を尋ねてゐたんだ。」

かう言つて、クウブリヤンも立止まつた、そして片手を銃の方へ伸ばしてゐた。

「来いよ、此處へ！」と、馭者が叫んだ。

クウブリヤンは静かに銃を外すと、狙ひを定めてぼんと一發撃つた。

「それ行つた！」と、嬉しげに、また毒々しく彼は叫んだ。

銃聲は斜面を轟いて行つて、風車場と風車の間へ入つて崩れたり、路上に教線をしてゐた小鶉の群を驚かした。馬も吃驚して駈け出した。それで馭者はまっさかさまに馬車の中へ飛び込んでしまつた。

「おい、助けて呉れ！」村長は泣聲を立てゝゐた。

巡査はぶるぶる顫へる手先に手綱を執ると、馬に劍鞘を打振り打振り、山麓に向つて馬車を驅つた。

馬車は跳つた。板と板との合せ目がみししと鳴つた。そして鈴の音を立てながら下の方へ飛んで行つた。

「クウブリヤンは反対の方へ踵を返して、路から林の方へ走つた。濡れた土がこてこてと足に着くので、水溜のある度にそれをぼちや／＼と搦つた。

三頭揃ひの馬は鈴を鳴らして、脚音高く村近くへ飛び込んだ。そして村の中を通り抜けると、鼻をならしながら、またよろ／＼しながら、郡役所の前に立止まつた。村長と巡査とが馬車の中からはたりと轉げ出た。村長は帽子をなくしてゐた。

「いやはや一大事！」と、彼は自分の膝頭を打つて、息を詰らしながら言つた。

「到頭クウブリヤンを逸がしちまつた！」と、馭者は頭を掻いて、氣樂さうに馭者臺へ登りかゝつた。

「こら、……わしのことは饒舌るんぢやないぞ！」巡査は彼に拳を振揚げて見せた。馭者は吃驚した。

「えッ？ 俺あ何も……。たゞ彼奴がぼんと撃つた拍子に……。青年は想ひ起すと堪らなく可笑しかつた、そして嬉しさうに眼まで細くした。

「撃つた拍子にな！ 若しもお前の腦天に中つたら何うだ？」と、叱るやうに村長が言つてきかした。

「中つたッて構はんど！ そんなこと何でもないや。」と、馭者は平氣で答へた。

「それはさうと、イワンさん、あんたは何うしたんです？ 撃たなかつたぢやありませんか？」と、村長が問ひかけた。

巡査は顔を赤くした。

「本當に何うしたのか……。いくら捜してもピストルが無かつたのです、そのうちに馬があゝの騒動でせう……。だからもう。」

郡役所から書記のジャーエフと書記生共が駈け出して來た。

「誰が撃つたんです？」と、物珍らしさうに書記が尋ねた。

「クウブリヤン。」と、馭者臺から馭者が答へて、「巧く撃つたよ、も少しで頭の上を掠る所だつた！」と、にこ／＼した。

「嘘！」

「いや全く。」と、巡査が確めた。「まアあちらへ行きませう。私がすかり話します。」

こゝでは何ですから……。」

官憲は郡役所に引込んだ。

「私も大方そんなことぢやないかと思つてゐたんです。」巡査が出来事を語りきかせた時、書記がかう言つた。「實は、今しがたそのクウブリヤンが鐵砲をもつて此處を通つて行つたんですよ……。ほんのたつた今……。」

「何うしてあなた方は取抑へなかつたのです？」と、巡査が訊いた。  
「でッぶり太つた書記は空嘯いてから。」

「あんたこそ何うして取抑へなかつたのです？」と、負けぬ氣を出して少々皮肉な問ひ方をした。

「それがその……。何ですよ……。」

「それがその何でせう、イワンさん……。まあ、此の事件だけは巡査さんとしても報告しない方がよい……。」と、私はかう思ひますがな。」

「それは勿論……。……報告するには及びませんよ。」と、巡査も同意した。

「だが馭者には饒舌らぬ様によく言つて置かなくては。」

と、そこで早速馭者を呼んで、口外せぬように彼に命じた。

馭者は外へ出て、のこゝと馬車の坐席に上つた。そして靜かに鈴の音をたてながら、馬を立場茶屋の方へ進めた。時々彼は

「あゝあゝ」と言つては頭をふつた。

クウブリヤンは此の時、窪地を通つて沼の邊へ辿りついた。其處にはもうワーシカが坐つてゐた。

クウブリヤンは息を切つてゐた、草臥れてゐた。然し役人共の膽をひやしてやつたので頗る満足の態であつた。

「貴公か？ 今撃つたのは。」と、ワーシカが問ひかけた。

「俺だ……。も少しで村長に中る所だつた……。」



「嘘！」

「全くよ！」

そこで、クウブリヤンが事の顛末を話してきかせた。

「さうか、そりやア巧いことをやつた！」と、ワーシカは稱賛した。「どうだい奴等こんなもんだい！」

「まアいゝや。」クウブリヤンは今朝のワーシカの臆病ぶりを想ひ出して、顔を歪めた。ワーシカは沈黙した。

「食ふものは無えか？」と、リウブリヤンが訊く。

「麵麩がある。」と、ワーシカが答へる。

二人は食事をして、そして濡れた枯柴の吹溜りに寝轉んだ。

また雨が降りだした。空はだんぐり低く垂れ下つて來た。風も、あたりの黒い梢を揺りながら吹き始めた。

最早晩になつてしまつてから、クウブリヤンとワーシカとは裏道を通つてデルノ  
ーウォエに向つた。ワーシカはグニャーウイの所へ行き、クウブリヤンは野菜畑を踏  
んでエゴール・シバーエフの家へと忍び寄るのであつた。

## 九

暗い、風の強い、泣きたくなるやうな晩であつた。

クウブリヤンはそツと口笛を吹いては、野菜畑の向ふへ眼をつけてゐた。その野菜  
畑には、何も無い赤土の畦を渡つて、こちらから門の所まで、踏附けて出來た徑が  
のたくつてゐた。其處からクウブリヤンに見えてゐたのは、家の屋根と、その下の楡  
の木で、それから又柴垣の隙間には窓の火影が見えつ、隠れつ、ちらついてゐた。  
誰かしら家の中を歩いてゐた。

（夕飯の仕度だな。）かう思ふと、泣きたくなるやうなたより便ない孤獨の感が、クウブリヤ

ンの胸中を駆け抜けた。

彼は急に一種言ふべからざる侮辱を覺えた。といふのは、彼が野菜畑に風に雨に曝されてマトローナを待つてゐなければならぬのに、エゴール・シパーエフは腰掛に治まつて、氣樂さうに夕食を待つてゐて、思ひ立つた時に思ひ立つたことを彼女と爲し得たからであつた。嫉妬の情はいよ／＼彼の心を捉へて來た。するとマトローナが淑やかな顔付をして今夫を見守つてゐる様や、そして夫の毆打にも撫愛にも絶対に服従しようとしてゐる彼女の姿が、はつきりと彼の眼の前に描き出された。それに續いて、彼女はもうそれほどエゴールを恐れてはゐないのだ、ひよつとしたら彼はクウブリャンと手を切つて、再び夫を愛しようとしてゐるのかも知れない、夫が岩乗がんじやうな美しい男で、而も女達の好く兵隊であり、下士であるのをよい事にして、など、クウブリャンには思はれるのであつた。

クウブリャンは咽ばしい瘧撃に喉元を捉へられた。

彼の顔は歪んで、兇惡な、不自然な微笑になつた。クウブリャンは兩足を擴げて、箱柳の冷たい幹に背を靠れた。そして背中を蟻が走るやうな感じを覺えながら、眼を瞑つたが、自分ではそれと知らずに大聲を揚げて言つた。

「彼奴等にとつては誰でも同じことなんだ……女なんて知れたもんだ。……」

風は箱柳の頂に中つて、あたりは一層暗くなつた。遠い方の箱柳は一つの暗い群となつて動搖してゐた。家の中の燈火は猶も明るくなつて、柴垣の隙間から星のように光つてゐた。そして瞬くのを止めてゐた。

「坐つたんだ。」と、クウブリャンは思つた。

足がづき／＼疚めて、肩が莫迦に寒かつた。そして彼は風の跡切れる度に大きく胴震ひをしてゐた。然し彼は依然衝立つた儘、大きく睜つた眼を燈火から離さなかつた。それがために彼の眼は涙ぐんで來て、燈火が二重に見えたり、長く伸びたり、鋭い小さい金色の矢を幾つも放つたりした。

不圖その火が消えてしまつた。

クウブリヤンは戦慄した。

「寢たのだ。」と、彼は思つた。「では直ぐ出て来る……。彼奴が寢つきさへすればツて、アニニータが言つたのだから……。」

此の最後の一句を浮べた時、クウブリヤンの眼の前に厭はしい一場の光景が見えた。

「あの馬の骨め、幾年も兵隊に行つてゐたのに……。果報者だ！ 女の方では誰でも同じことなんだから！」と、思つた。そしてクウブリヤンは肩が疼き出したかのやうにそれを揺つた。

妬ましい冷たい憎悪の感が彼の全身を駆け上つて、やがて頭に飛び込んだ。それで彼は一瞬時の間眼が眩んでしまつた。

ニゴール・シバーエフに對する嫉妬と憎悪とに並んで、彼の心中に動き出したのは

マトリョーナに對する深い怨恨であつた。此の際彼はもう彼女を不憫な者と思つてはゐなかつた。

クウブリヤンは帽子を脱いで、また冠つた。が、眼は依然として、瞬きもせず、今は暗くなつてゐるその家を覗めてゐた。あたりも最早眞暗になつて、家も柴垣も楡の木も一つの侵し難い暗い集團となつてしまつた。

不圖徑の上と覺しい闇の中に何やら白いものが朦朧と浮んで、ちらりと閃いたと思ふと、また溶けるやうに消え失せた。

クウブリヤンは心臓をどきつかせて、全身をのり出した。感情といふ感情は悉く彼の頭の中から一時に飛び去つてしまつて、嬉しいともつかず、怖いともつかぬ或る期待の感覺だけが其處に残つた。

白い影はだん／＼近くはツきりとちらついて来て、忽ち細長い女の姿になつた。その半面像は頭に大きな被布フクロを纏ふてゐた。

マトリローナは脇目も觸らず急いで徑を歩いて來た。クウブリヤンは進み出で彼女を迎へた。

「あなたですか？」と彼女が訊いた。けれど餘りそつと言つたので、クウブリヤンは漸く聞きとつた。

「俺だ……俺に……きまつてるぢやないか……。」と、跡切れくクウブリヤンが答へた。

彼女は大きな被布を纏ふて、それをば隠れた両手で頸の邊で支へてゐた。だから眉毛と大きなおづくした眼しか見えなかつた。

二人は黙つてゐた。

二人共、お互の間にエゴールの現はれたことに因つて、一種異様な氣まづさを感じてゐた。クウブリヤンは無理に平氣を装ふて、ポケットに両手を突込んだまゝ、彼方此方を眺めながら空嘯いてゐた。彼女は彼女で躊ひつゝ、凝と彼の前に立つてゐた。そ

して被布の下から探るやうに且悲しげに見えてゐた。

「それ見ろ、今ではまるで……。」かはつてゐる……。」と、クウブリヤンの頭に閃いた。けれどマトリローナとしては痛心の至りであつた、そして此のやうな密會は恥づかしかつた。何となれば、戀人の手前彼女は自分を些も疚しい者とは思ひ做してゐなかつたから。

「先づ……クウブリヤンさん今晚は。」と、彼女はやがて靜に口を開いた。

「今晚は……。」クウブリヤンも呟いた。

マトリローナは黙つてしまつた。それから顔を開いて、申譯無さそつに莞爾とした。「どうしてかうなの？」と、彼女が訊く。

クウブリヤンは彼女を視てゐたが、思ひ切つて髪の毛を揺つたと思ふと、兩手を開いて彼女を抱き込んだ。彼女は被布の下から自分の手を伸べて彼を抱いた。彼女はスカートより上は上衣一枚であつた。で、その裸の胸からは熱い濕つばい空氣が

出て来てクウブリヤンの顔にあたつた。

數分の間彼等はいくして黙つたまゝ重い呼吸をして立つてゐた。

空には千切れ雲が微かな光の波を連れて流れてゐた。風は發作的に唸をたてゝは沼の方から枯蘆の呻き聲と、跳ね上る水の音とを傳へて來た。

「腰を卸しませう、クウブリヤンさん。」と、顫え聲でマトリョーナが囁いた。

箱柳の近くに濡れた乾草の崩れかゝつた小山がぐったりと動んで見えた。二人は互に足と足を縛らせながら其處へ行つて、そして朽ちた草の中へ腰を埋めた。風は騒ぎに騒いだ。

「私、もう行く、クウブリヤンさん。」と、三十分ばかり経つてからマトリョーナが囁いた。

「あちらに何か用事があるのか？」

「澤山でせう今日は……私怖いから……。」

クウブリヤンは一時に冷くなつた。そして亦先刻のやうに眼が眩んだ。

「ちや行けよ……。」

彼女を突き退けながら、彼は鋭くかう言つた。

「怒つてるの？」と、彼女が訊く。

「怒つた所で仕様はねえ……。解つてらあ……。亭主が。」と呟いて、クウブリヤンは唇を噛んだ。

「あら、私が？……。」

「いや何れ解るよ！」と、亂暴に、而も何を言つてるのか、何故かう言つてるのかも辨へずに、クウブリヤンはたゞ言ひ放つた。

「何が解るの？」と、マトリョーナは訊いた。がその聲には涙と恥辱とが聞かれた。クウブリヤンは何も言はずに脇を向いた。

「何故あなた黙つてるの、クウブリヤンさん？ え、クウブリヤンさん……。」

「いや……何處へでも行けッてことよ！」と、破れたやうに言つて、クウブリヤンは立ち上つた。

マトリローナも矢張立つた。そして被布を纏ひながら彼を覗てゐた。風は騒いでゐる。

「何を怒つてるの？」と、彼女が言ふ。

クウブリヤンは何かしら毒々しい無鐵砲なことを彼女に言つて見たかつた。けれど何と言つてよいか解らないで、黙つてゐた。

マトリローナはそツと被布の下から片手を差伸べて、彼の袖をとつた。

クウブリヤンは荒々しく振り切つた。

「その儘にして置くものか！……貴様等は皆……。」と、荒々しく舌味を籠めて罵つた。

すると直ぐ又彼はマトリローナが可哀相になつた。同時に自分が面憎くなつた。

マトリローナは片手を垂れて泣きだした。

「私、好きで行くと思つてるの？」と、彼女が訊いた。

クウブリヤンは氣がくしやく／＼してゐた、苦しかつた、恥しかつた。然し嫉妬の熾は彼のうちにある凡ての感情を焼き盡してしまつた。それで彼は無理を言ふとは知りながら荒々しく言つた。

「厭なら行く筈は無え。」

マトリローナは狼狽しながら涙を透して彼を見た。

「何うして？……」

「何うもかうも無え。」と、クウブリヤンは頑固な返事をした。「さうぢやないか……。行けよ！……。」

「でもクウブリヤンさん、あの人は私にとつては夫ですもの。まさか私に……。」

「行けッてば。もういゝ、行け！」と、クウブリヤンは毒々しく大聲をたて、固め

た拳をふり揚げた。

マトリローナは吃驚して身を避けたまゝ、一時に立竦んで小さく細くなつた。

「打つちや厭よ……。」彼女はおづくと言葉を洩らした。

クウブリヤンは自分を絞めつける燃ゆるやうな嫉妬の情に出口を興へるため、彼女を殴りたかつた。

「行け……。」

彼は女に詰め寄りながら、太い聲でかう言ひ放つた。

マトリローナは本能的に肘を顔の高さまで揚げた。けれどこの動作をしたがために却つてクウブリヤンを破裂さしてしまつた。

「毒婦！」と喉で聲を出して、彼は女を突き飛ばした。

マトリローナは短く、傷ましく、あつと言つて躊躇けた。被布は頭から落ちて、その拍子に風に飛ばされた長い髪の毛がふさふさ顔の前に垂れた。

「これではあんまりですよ、クウブリヤンさん。」と、被布を拾ひながら彼女は言つ

た。「私は……いつも貴方に……。かうまでされる覚えはありません……。」

そして彼女は再び泣き始めた。

クウブリヤンは堪らなく恥しくなつた、堪らなく彼女が可哀相になつた。

「何だと……。」彼は呟いた。

マトリローナは泣くのを止めて被布の角で眼を拭つた。

「あのね、クウブリヤンさん……。」と、祈るが如く彼女は呼びかけた。

然しクウブリヤンは又しても、どうせ萬事休すだ、今日明日と言はず彼女はエゴールの妻とならねばならないのだと想ひ起した。すると彼は又しても、嫉ましい憎悪と便ない感情の溢れて来るのを覺えた。

「何が——クウブリヤンさんだ？……行けよ自分の亭主野郎の方へ！……。」

「クウブ……。」

「行け行け。」と、齒齧みをしてクウブリヤンは言ひ放つた。が、更に憎悪のこみあげて来ると共に、被布一枚しか羽織つてゐない女の嬌かな細い肩を捉へて、荒々しく彼方へ向けると、物をも言はず突き飛ばした……。

マトリョーナはもう少しで轉ぶ所だつた。が泣きく徑を辿り始めた。

クウブリヤンはぼんやりその後姿を見送つてゐた。

彼女は立止まつた。クウブリヤンは黙つてゐた。

「クウブリヤンさん！」と、彼女が呼んだ。

クウブリヤンは答へなかつた、そしてだんく蒼褪めた。

「クウブリヤンさん！」聲を張りあげて彼女が言つた。

クウブリヤンは身動きもしなかつた。

彼女は尙少時立つてゐた。が、もう一度彼を呼んだかどうかは風のために聞えなかつた。それから彼女は靜に愚圖々々と上の方へ歩いて行つた。彼女の影は闇に融

けかゝつた。

「マトリョーナ！」

クウブリヤンは忪えきれなかつた。

然し彼女には聞えなかつた。そして霧にでも没するやうに消えてしまつた。

風は箱柳にあたつてゐた。蘆の呻きと水の跳ねる音も一層はつきりと聞えて来た。

空には黒雲が今はもう密集して疾く流れてゐた。そして雨の雫がぼつりくくと濡れた畦の上に重たく落ちて来た。

クウブリヤンは足を擴げて、兩手を深くポケットに差込んで、しよんぼりと立つてゐた。そして矢張家と、塀と、風に揺れてる楡の木の像を眺めてゐた。邸の内で犬が吠え出して、また黙つた。雨はますます強くなり、あたりの闇は一層濃くなつた。遠い方の樹木は降り頻る雨の帷の彼方に、闇に濡れて、たゞ近い所の一本の箱柳ばかりが驅されたやうな泣きたげな恰好をして見えてゐた。その木は風のまに／＼曲



つた末端の枝を力なく動かしてゐた。  
クウブリヤンは身を揺つて、もう一度便ない大苦を抱いて後を見たが、やがて泥濘を捏ねながら野菜畑を渡つて行つた。

## 一〇

ヒョードル・グニャーウイの家の窓には、縊縷のやうなものが懸かつてゐて、それに淡い光が映つてゐた。

クウブリヤンが門を叩いた。

家の中に人の動く氣色がして、窓に影法師がちらついたと思ふと、やがて扉を開ける音が聞えた。

「誰だえ？」と、玄關からグニャーウイが言葉をかけた。

「他の者ぢやねえ。」と、クウブリヤンが答へた。「開けて呉れ……。」

「いま開ける。」

門がこつんと言つて、扉が不同な蝶番で内側へ引込んだ。クウブリヤンは腐つた糞と鶏の糞と煙の香に襲はれた。闇の何處かで鶏共が動き出した。そして一羽の雄鶏が寢惚けたやうに、い——ツと長い吃逆をした。

クウブリヤンは家の中へ通つた。グニャーウイは胸を掻きしな空を見上げて、扉を締めると、欠伸をして口に十字を描きながら彼の後に續いた。

「あ、あ……もう餘程晩いのか？」

長腰掛の上に外套を被つて眠つてゐたワシカが、不安さうに、もしやく／＼になつた顔を擡げたが、しげ／＼クウブリヤンを視ると、またその頭を外套の上に落した。クウブリヤンはゆつくりと帽子や長靴を脱いで長腰掛に腰を卸した。

グニャーウイも聖像の傍に席を占めた。彼は縞のズボン下だけ穿いて、跣足で、灰色の厚い上衣を着て、そのはだかつた襟の中からは黒い毛むくぢやらの胸が露出し

てゐた。それで彼は尙一層ひよろ長い男に見えた。彼は胸や背中を掻いて、咳を一つして、頭を垂れた。

ワリーシカは外套の下から眺めてゐた。

家の中は暗く、汚く、息苦しかった。寝煖爐の上や床の上にはグニャーウイの小供等が外套や薦こもを被つて眠つてゐた。そして皆調子を合せて鼻をすうくさせてゐた。油虫が壁を駆け廻つて、その影がまた後から跟ついて廻つた。煖爐の蔭では蟋蟀こはらぎが單調な音を發してゐた。風が濡れた屋根の藁を引張り出すらしい氣色けはひも聞えた。

クウブリヤンは黙つて座つてゐた。

「腹でも減つてるのか？」と、グニャーウイが問ひかけた。

クウブリヤンは澁々頭をふつて、

「いや……。」と、氣乗のしない聲を出した。

グニャーウイは痘痕だらけの指で胸を掻いて、思ひ入つて、その垂れ下つた眉毛を

擧ひめた。

「マトリョーナに會つたか？」と、物珍しさうに、頭を擡げてワリーシカが訊いた。

「會つた。」

「何うだつた？」

「なんともねえ。」

クウブリヤンは厭はしげに答へた。

「そんな事はあるめえ？」と、今度はグニャーウイが髭の奥で微かに言つた。

「心配するなよ……。」

クウブリヤンは片手を振つて見せた。

「女の方は、何しろ女の方は大變だ！」と言つて、グニャーウイは溜息をついた。そして齒のない口をもぐく／＼させた。

「そりやアもう無論……うまい譯にや行かねえ！」と、ワリーシカも合槌を打つた。

クウブリヤンは黙つてゐた。

「おいクウブリヤよ……。本當に罰が當るぞ！」と、グニャーウイが曖昧な聲を出した。

クウブリヤンは一寸彼を瞥た。そして眼を伏せた。

「今更そんなことを……。」

ワシカは人を馬鹿にしたやうな笑を浮べた。

「何も綱をつけて曳き出した譯ぢやあるめえ？ 女が自分から來たんだ……。」  
グニャーウイは眉を顰めた。

「また飴を啗めさせようつたつて、さうは行かねえや……。それで女も甘い辛いが知れるさ！」と、ワシカは笑ひ出した。

グニャーウイは溜息をついた。

「だが何も彼も——クウブリヤの罪だ……。女は——何うだ？ 女は馬鹿だ、その馬

鹿な者を……女を奴は罪に誘つたんだ……。だから矢張奴の罪だ！」

クウブリヤンは猶も目を伏せた。

「こんなことをくどくと言ふのも罪だ。」と、蔑むやうにワシカがひとりで批判してゐた。「そりやア解つたことだ……。」

「所が解らぬ奴もあるツて……。」

ワシカは皮肉に笑ひ出した。

「盗んだ馬を賣拂ふのも、また馬泥を隠して置くのも矢張罪ぢやねえか？」

グニャーウイは一寸黙つてゐた。

「そりやア事がちがふせ。」と、穩かに彼が言ひ返した。「馬は——動物だが、あれは女だ……。」

「いや、女にした所で矢張同じことサ。」と、ワシカはくすくす笑つた。「それがために女共は造られてゐるといふもんだ。——俺等が工場などでは、娘ツ子がどんな

ことをしたって、もう其の儘にやして置かねえ……。此の方面へかけては俺も可也通だが……。」

「よせよ……工場から出て来た亡者ぢやあるめえし！」と、鋭い叱咤を含めて、グニャーウイが壁の中から唸つた。そして今度はクウブリヤンの方へ向き直つて言つた。「本當にお前、女は棄てろ……。悪戯もいゝ加減にしねえと神様の怒を招くだ。直ぐ棄てろ！ エゴールが打擲するぢやねえか、女を……。」

「今更そんな事を……。」と、クウブリヤンは苦しげに愚圖々々と呟いた。

「だが何故お前もそんなに女を虐しめるんだ？」と、嚴しくグニャーウイが詰つた。「俺も……。」

「女一人疵物にしてしまつて……。而も兵隊の噂を……。」

ワリーシカはまたくすくす笑ひ出した。

「そ、そこだて。あの女はもうさうした運命をあてがはれてるんだ。そこが兵隊の

噂だ。兵隊の噂には神様がちやんと……。」

「神様が？」と、物體つけて、また輕蔑してグニャーウイが訊き返した。「おい、工場通よ、お前に、神様が解るかえ？」

「へ、貴公にした所で俺以上に神様のことを考へては居るめえ！」

「なんの、俺は考へてゐる。だがお前達は何故そんなに女共を苦しめるんだ……。とにかく人騒がしをするそ様なことはねえぞ……。」

グニャーウイは咳が出て来たので言葉を打切つた。それから起ち上つて、跣足の音をたて、煖爐の上へ攀ち登つた。

あたりは閑とした。蟋蟀が壁のあちこちで哀れな聲を出してゐた。さらさらと軽い音を立て、油虫も敏捷に駆け廻つてゐた。

クウブリヤンは頭を垂れて、何か考へながら、しばらく机の脇に坐つてゐた。「ワリーシ……。おいワリーシ……。」と、彼は呼びかけた。

ワーシカは答へなかつた。

「ワーシカ！」と、聲を張りあげてクウブリヤンがまた呼んだ。

「何だい？」ワーシカが寢惚けた返事をした。

「俺はなア……。」と、落ちつきもなくクウブリヤンが話し始めた。「ほら上流社会の人達が言つてるだらう。若し夫が、いや妻にしても……。」

クウブリヤンは、何とかよい言ひ方を見出さうと苦しんで、舌を縋らしてしまつた。

「む？」

「つまり離縁すれば……さうすれば誰とでもまた結婚出来るツて言ふぢやないか……。」

「そりやア上流の人達はなア！」と、ワーシカが合槌を打つた。

「ぢやア百姓共にや出来ねえのか？」と、自信の無い聲を出して、クウブリヤンが

訊いた。

「なあに、法律上ぢや出来る。出来るに違えねえが、何でも大變な金が要るといふことだ……。」

「誰にやるんだ？」クウブリヤンは異んだ。

「誰に？ 極つてるぢやねえか、和尚等によ！」と、ワーシカは笑を浮べた。

「澤山やるのか？」

「逆も貴公には出せねえ。上流の者だツて、——皆が皆出来るんぢやねえから……。」

「するとヤツぱり駄目かな？」と、調子を落して、クウブリヤンが訊いた。

「知れたことよウ。」

暖爐の上からグニャーウイの唸れ聲が聞えた。

「下らねえ事を思ひついたもんだ！」

「でも法律上ぢや出来る……。」

「法律上は出来るとも！」と、ワシカが頭をふるツて言ひ返した。クウブリヤンは猶も坐つて黙つてゐたが、やがて深い溜息をついて、長腰掛の上へ横臥することにした。

油虫が駈け廻つてゐた。グニャーウイは燧爐の上で唸つてゐた。蟋蟀こはらびは驚いたやうな單調な音を發してゐた。

家の中の空氣は、狭くなる程こゝろが轉つてゐる人々や、動物や、濡れた着物などで、ますます濃く重くなつて行つた。

## 二

郡役所の傍に三頭馬車が乗り捨てゝあつた。馬が頭を振つたり、鈴を鳴らしたりしてゐた。

今警視と署長とが馬盗人の逮捕に出張した所である。馬盗人の横暴な振舞に關す

る取沙汰は、早くも新聞紙によつて縣知事の耳にまで届いたのであつた。

知事は新參の無經驗な人であつたから、事件を莫迦むかに大形おほざかうに思つてしまつた。で、彼は蒼皇として、その日のうちに馬盗人至急速捕の命令を發した。

警視の方はもう長いこと此の職に就いてゐる人で、馬匹竊盜などいふことは以前からよく知つてゐた。そして適當な時に適當な處置を執つてゐた。といふのは、つまり署長等に適當な命令を授けて、彼等から其配下の巡査に傳達させたのである。けれど殊更に之を氣にかける者はなかつた。何となれば竊まれる馬はただ百姓馬ばかりで、その位の事なら誰も皆尋常普通の免れ難い災厄と心得てゐたからである。郡の當局などは、百姓は大概馬盗人だと思つてゐた。だから事があつても見て見ぬふりをしてゐた。今や此の警視、署長、巡査等にした所が、實際に馬盗人を逮捕するといふことよりも、寧ろ縣知事の命令を態よく履行するといふことに餘計腐心するのであつた。

警視は郡役所に上り込むと、頻に署長と談議してゐた。それは馬盗人を他の郡へ追ひ拂つて、そうして手取早く負擔を卸さうといふ算段であつた。で、兎に角郡境に接してゐるデルノーウエ村の林に驅立を始めることに決した。何しろ巡査の（クウブリヤンとの邂逅に就いては黙過してゐる巡査の）報告によれば、その林中で二人の馬盗人に逢つたものがあるといふことであつたから。

「では、あの林を三方から圍んで、彼等をスパッスキイ郡へ壓し出すことにしませう！」と、キツぱり警視が言つた。

縣知事の命令中には、尙隱匿者の発見された場合のことを言つた箇條があつた。しかし警視は此のことに就いては、てんで言ひ出しもしなかつた。何故ならば、馬盗人を悪魔以上に恐れてゐる百姓等の間で、これをなすことは最早不可能事にきまつてゐたからであつた。

いよいよ驅立準備といふことになり、デルノーウエ村の百姓ばかりでなく、隣接二ヶ村、タラーツフカ及びリャポーフカの者をも驅り集める間、警視は所在なきに巻煙草を燻してゐた。そして大きな口髭のある、でッぶり太つた、痘斑面の署長と二人で歌留多遊びのことを話してゐた。

肥え太つてる書記のイサーエフは何だか少し細つたやうに見えた。彼は息をはづませ、汗を拭きしな、親玉連にちやほやしてゐた、そして一分毎に出入口の處へ駆け出しては、驅立準備を監視した。巡査は居なかつた。彼は村長と二人でタラーツフカへ村民集めに出かけてしまつた。無論それは餘計な事で、彼が態々行つて見なくも出来てしまふのであつた。けれど彼は親玉連の手前大に奮發したのである。

兎や角するうちに群集は消防小舎の所に寄つて来て、低聲に騒いでゐた。デルノーウエ村の百姓は残らず集つてゐた。早く来たリャポーフカ村の者もそこにゐた。彼等は彼等で一團を成して、デルノーウエ村の者と混らなかつた。

百姓等は、官憲の怒を氣遣つて、自制してゐた。にも拘らず、空中に唸りが立つ

てゐて、而もそれが時々太い唝鳴り聲に跡切られた。尤も大聲は揚がつても直ぐ亦静まるのであつた。

群集の中には怖ろしいともつかず、不快ともつかぬ一種の氣分が漲つてゐた。馬盗人の驅立と逮捕とが必要であること、そしてそれが彼等自分のために行れるのだといふことは、誰にもよく解つてゐた。が、それでも百姓等は此の仕打に同感出来なかつた。一面からは、彼等は馬盗人の復讐として放火を恐れてゐたし、他の一面からは、彼等の逮捕の可能を疑つてゐた。

曾てクウブリヤンと出逢つて、酒の勢で彼と口を利いて、それから書記の取計らひで冷たい一室に入れられてゐたあの指物屋のセミューンは、驅立を、役人を、殊に書記を冷笑してやることを以て自分の義務だと思ひ込んだ。

「なあに召捕れるさ」と、甲走つた鋭い聲を出して皮肉さうに言つた。「高が二人ちや無えか！ こんなに出捕はないでも、手取早く出来るんだ……。あのデブさん

だけでも召捕れぬことは無え……。」

側に立つてゐた者は皆笑ひ出した。しかし村の金満家の中の一人で、背の高い太つた百姓のヒュードル・ステバーノフが、セミューンを遮つた。

「何を下らねえことを言つてるんだ。」と、さも蔑むやうに、セミューンの方へ横腹を向けたまゝ、彼が言つた。「人騒がしになるだ……。氣をつけるがい……。。」

セミューンは顔を赤らめた。

「何も俺あ、そんなことを言つてるんぢやねえ、たゞ後で愚痴をこぼさぬやうにさ……。捉まへようとして捉まへなけりやア、却つて怒らして煽りたてるやうなものだ……。その時にや何うするつて？」と、フュードル・ステバーノフに突掛かつて行つて、勝ち誇るやうに彼はかう結んだ。

「何うする？」と、蔑むやうにヒュードルが詰つた。「さうなりやア、奴等に手がつけられねえのか？ 馬は盗むに任せるのか？……そんな氣なんだらう？……。」



「セミョーンだけは大丈夫だ！ 貧乏になる氣遣ひは無え。」と人を馬鹿にしたやうに、背の高いカシヤン・ルイジイ（ルイジイとは赤毛のといふ意）といふ百姓が言つた。

皆、セミョーンを笑つた。

セミョーンは腹を立て、憤つた。彼はカシヤン・ルイジイに突掛かつて行つて、口から泡を飛ばしながら嘔鳴つた。

「黙つてる方がいゝんだ……。自分の家にだつて盗んだ頸木の外にや何もありません。それを同じ氣になつて……。」

「誰が盗んだ？ おい、貴様は見たのか？」と、威嚇しながら、ルイジイは彼の方へ寄つて行つた。「どんな頸木を？」

「盗まないと言ふのか……。」

「いや見たなら見たと言へー」ルイジイは彼に嘔鳴りつけた。

セミョーンは慄えた。何となれば、カシヤン・ルイジイは彼より二倍も強かつたが、セミョーンは大體喧嘩好きの癖に、臆病者であつたから。

「寄つて来なくもいゝよ……おい……。」

「止めろ。」と、蔑むやうに、ヒョードル・ステバーノフがカシヤンに勧めた。「下らねえ、解つてらア！……。」

「いゝや、言はせてやる。」ルイジイは和らぐ様子もなく、わな／＼慄えてゐるセミョーンへ、拳を固めて攻めよつた。

「止せッと言ふにー」ヒョードルは繰返して言つた。

然しセミョーンは、群集の中へ退却ひきさがしながら、また大聲を出して。

「俺等に言はせりや、こんなことは私刑で澤山だ。」

「そりやア何うするッてんだ？」

「何うもかうもねえ……他の者の馴れつこにならねえやうに、棒杭で以て……頭の

「脳天からどやしつけてしまふんだ！」

「まア、滅多なことと言ふもんでない！」と、ロマニク（咄家）のニキータといふ、多識者で偽善者の百姓が、細い驚いたやうな聲を出して、それに應へた。

「そんならあいつ等を何うすればいゝんだ？」

「それが詰らないことゝいふものだテ……。」

けれど、群集の中では何やら物を言ひ始めた。最初の程は小膽に言つてゐたが、やがて、馬を失くしたために馬盗人を悪んでゐた百姓共などは、だんく激昂して、聲を大きくした。

「いや……。全くあの通りだ。本當に……あいつ等を何うすればいゝんだ？」

「俵に詰めて河に流すさ。」と、曖昧に言つた。それは隣村のタラソフカの百姓で、黒い痘痕面をした、背の高い、殿めしい男だつた。

「さうだく。」と、群集は騒ぎ出した。「さもなけりやア……何とも仕様が無え……。」

滅茶苦茶だ……。」

「何を、まア、皆はべらや〜〜繞舌つてるだ？」と、下賤な泥醉漢で、村中切つての貧乏者で、ポロート（沼地）のファミといふ男が、力の無い眠つたげな聲で反駁した。彼は大きな軀をして、跣足で、酔つてゐて、むくんだやうな、人の善さそうな顔をしてゐた。

「全くさういふことでもするか……。それとも残らず馬の取られるのを待つてるか？」と、タラソフカの鍛冶屋が陰氣な問を出した。

「待つにも及ばねえ。」と、酔漢のファミが溫和しく反駁した。「と言つて打ち殺すにも及ばねえ。生かすとくがいゝや……。」と、彼は片手を振つて見せた。その手付が如何にも悪氣が無く、如何にも酔漢らしかつたので、周囲にとつと笑聲がたつた。

馬盗人には、驅立の外、何も悪戯をすまいといふ側へ左袒した者に、尙ロマニクのニキータとモジャウイとがあつた。モジャウイの如きは泣き出しさうに眠つ

たげな眼を瞬いてゐた。そして大概は黙つてゐた。なほ、馬盗人に私刑を執行するといふ案は棄てた方がよからうと勸告する人々もあつた。けれど大多數の者は、その位の事はする必要があると叫んだ。

「犬には、犬死だ！」

處が、眼前に差迫つてゐる驅立には、誰一人言及した者がなかつた。それは誰も皆之を本當に思はなかつたからである。誰も皆之を當局の氣まぐれに企てた下らぬ事だと觀てゐたからである。

でも、兎や角するうちに、タラーソフカの村民も一群となつて遣つて來た。そして村長、巡查も歸つて來た。書記は驅立の勢揃ひが出来たことを警視に報告した。警視は、署長との談話をつゞけながら、外套と帽子を着けた。署長も同じ事をした。そして皆一緒に出入口の方へ出て來た。

彼等が現れると、澤山の帽子は早くも順々に消え失せて、數百の赤い毛や、黒い

毛や、白毛や、禿や、縮毛の頭が露出した。騒々しかつた人聲は忽ち靜まつて、誰も皆多少の恐怖を覚えながら、伸びあがつて、役所の方へ向いて、そして立つてゐた。警視と署長とは四輪馬車に乗り込み、村長と巡查とは二頭しかつてゐない別の馬車に乗り込んだ。書記は、外套と綿の烏打帽とを纏ふて、自分持ちの太つた赤毛の牝馬を一頭つけた快走馬車に上つた。そばには葦毛の馬の仔が絡まつてゐた。

警視の馬車が、鈴を鳴らして出發すると、これに續いて、その外の馬車も動き出した。そしてそのあとには、外套と草鞋姿の土百姓の群が轟めいた、が偶には巨大な長靴も雜じつてゐた。百姓のうちの多くの者は、帽子をとつたまゝ歩いて行つた、群集はまるで家畜の群みたい、濃い泥濘を捏ねながら、林へ行く路の上に殺到してゐた。

## 一一一

村に居残つた者は極めて少数であつた。醉漢ようはんのフォーマ・ポロトもその一人であつた。彼は此の口妻に死なれたのであつた。それからモジャーウイも残つてゐた。彼は裏路をとつてくゞとわが家へ逃れる所であつた。

フォーマは、躊躇ちゆうちゆうしながら、埋葬の相談に和尚の所を指して歩いて行つた。が、モジャーウイの方はどこまでも裏路から裏路へ抜けて、ヒョードル・グニャーウイの茅屋くすやへ向つてゐた。グニャーウイも亦驅立に行かないでゐた、彼は郡役所へも寄合よあひに行かなかつた。

彼は庭のまん中に積んだ木材の上に腰を卸して、大きな斧で支柱を削つてゐた。モジャーウイを見つけると、彼は濃い眉毛を擧ひきめて、斧を丸太に打込んだ、そして、帯にしてゐた平打紐の所へ指先を突込んで、立ち上つた。

「お前は何うしたのだ？」堪りかねて、彼は問ひかけた。

モジャーウイは涙なみだ含んだ眼を瞬ひらいた。

「俺はちやんとさう言つてゐたんだ……。」

「何を？」

「今、皆が決めたやうな事は、俺がもう見越してゐたんだ。」

グニャーウイは尙も顔を蹙しかめて、怪訝けげんさうにモジャーウイを見据ゑた。そして尙も荒々しく太い聲を出した。

「お前は、何のことを言つてるのだ？」

「つまり、クウブリヤンを何なんしようと思つて……クウブリヤにその、豫め言つて置いたことよ。」モジャーウイは片言かたことを操あやつつた。何故かしら彼はグニャーウイを怖れてゐて、彼の前だといつても狼狽ろうたいへるのであつた。

グニャーウイは黙つて、何か思ひめぐらしてゐたが、やがて言葉を和げて言つた。

「皆が決めたつて言つたなア？、そりやア總掛りでやつちまふことか？」

「おう、それぞれ。」と、モジャーウイは元氣づいて、嬉しげに答へた。

「クウブリヤンを？」

「さうだ……。つまり役人衆の方で駄目なら、もう自分達の方でやつちまへつて譯だ。」

グニャーウイは嚴肅な面持になつた、盛めツ面になつた、そして頭を揺つた。

「さうか、さういふ事になつたのか？……。ンちや、誰がそれを？ エゴールぢやねえか？」

「ぢやねえ……。指物屋のセミ・ローンだ、それに亦ルイジイだの、その他これまでに……。」

「ふム〜……。兎に角前以て言つて置く必要がある。」

グニャーウイは、身の丈一杯にそり立つて、兩手を帶の所へ差込んだまゝ、口を

噤んでゐた。モジャーウイは所在なさに帽子を捻つてゐるだけで、歸るべきか、留まるべきか、何れとも分らなかつた。

「出かけたのか、もう？」と、グニャーウイが訊いた。

「かれこれ一時間位になる。」

「それだナ、家畜でも通るやうに聞えたのは。」と、嘲るやうに、グニャーウイが太い聲を出して言つた。「まあ、こつちへ來ねえか。」と、言ひ足して、彼は大きな草鞋をしつかりと踏みしめながら、家の中へ這入つて行つた。モジャーウイもその後に従つたが、手には容赦もなく自分の帽子を揉み續けてゐた。

家に這入ると、長腰掛にワシカとクウブリヤンとが坐つてゐた。机の上にはまだ飲み始めたばかりの酒徳利が立つてゐた。木製の皿の中には魚の干物が置いてあつた。

クウブリヤンは退屈してゐた。で、その顔に困憊と悲哀の色が漲り、ぱつちりと見

開いた眼には愁はしい涙さへ宿つてゐた。

「何も自分の好きで……ぢやないサ、そりや知れたことだ。」と、彼は思った。「それなのに俺は何うだ……。さなきだに、彼女は随分苦しい思をしてるんだ、そこへ持つて行つて、俺までが無體なことをしてしまつた！、ほんとに俺はどうしてあんなことをしたのか？ 智恵の根を神に奪はれちやつたのか？」

時々彼は厚い硝子のコップに酒を注いで、そろ／＼とそれを口に傾けた。そして飲めば飲む程、餘計淋しく、餘計陰氣になつて行つた。

ワシカは白面で、びく／＼してゐた。彼は一つ所に落着いて坐つてゐる事が出来なかつた。絶えず聴き耳を立て、は、瘦せた膝を病的に擦つてゐた。

グニャーウイとモジャウイとが家の中へ這入つて来て、聖像に向つて十字を描いた。モジャウイは扉の所に居残つたが、ヒュードルは長腰掛に腰を卸して、尻の下へ両手をかひこんだ。

「腰を掛けないか。」と、彼はモジャウイに頭を動して見せた。

モジャウイは溜息をついて、小さい眼を瞬いて、それから扉のそばに座を占めた。

「おい、クウブリャ。」と、グニャーウイはまるで樽かち出るやうな聲で言ひかけた。「今此の男から聞いたのだが、總掛りで私刑と決めたさうだせ……。」

ワシカは眞蒼になつた。

「ど、どうしてさう？」と、彼は言葉もしどろもどろだつた。

クウブリャンは顔を擡げた。そして、

「出鱈目を言つてらア、犬共が。」と、陰氣に徐ろに口を開いた。「親爺ぢやあるめえし、俺あ、さうは奴等の儘にやならねえ……。とろい男ばかりぢやねえか。」

グニャーウイは頭を振つた。

「でも兄弟、世間にはとろくない者もあるせ、だから、お前は素直に俺のいふこと

を聴いて、他の郡へ轉がり込んでゐる方がいゝ。若しもの事でも……。」

「若しものこととは何だ？ あんな土百姓等に指一本でも指されるやうな俺ぢやねえ。滅多なことをすりやア、野郎どもに火でもなんでも放つて遣るから、見てろ……。」

「その通りよ、」と、ワシカも元氣づいて應援した。「いゝ氣になりやがつて、土百姓の癖に！ こつち黨のすることは機敏なんだから……。」

「黙れよ、浮浪漢。」と、蔑むやうに遮つて、グニャーウイは、「おい、クウブリヤ、お前も知つてる通り、俺や悪いことは言はねえ、罪な事から身を退く方がいゝせ……。若しもの事があつたら換回はつかねえ！」と續けた。

クウブリヤンは片手を振つた。そして、  
「何れ解るさ。」と、言つてから、「親爺、酒は何うだ？」、モジャウイに訊いた。

モジャウイは黄色い齒の根を露はして、恥かしさうに笑を浮べた。

「さア飲め。」と、クウブリヤンが言つた。「俺も一つ飲んで……酔ふから。な親爺！」

二人は飲んだ。モジャウイは帽子を腋の下に挟むと、痘痕だらけの指を出して、そつと魚の干物を摘み始めた。クウブリヤンは更に一杯傾けて、少々酔つて來た。彼は、マトリョーナを忘れるために、また一つには彼に安心を與へない嫉妬と恥辱の感を鎮めるために、飲みたくて飲みたくてならなかつた。

「もつと酒は無いかい、爺や？」と、彼が訊いた。

「もうお前澤山だせ。」グニャーウイは笑つた。

「酔ひたいんだ……。酒を呉れよ……。」

「酒は無い。買ひに遣る者もゐねえ。——小供は皆何處かへ行つちまつた。クウブリヤンは頂低れて黙つてゐた。」

「無けりや無いでい……。ワーシカ、飲みに行かう……。」  
モジャーウイはくすくすと笑つてゐた。

「行かう、本當に。」と、クウブリヤンは言ひ張つてゐた。「それとも親爺をやるか……。親爺、行くか？」

モジャーウイはもじ／＼してゐた。

「俺は何だ……。」

「なら、いゝ。ワーシカ、行かう……。」

ワーシカは考へた。若し自分が行かなければ、クウブリヤンの奴酔拂つて、どんなことを仕でかすか解りやしない。行けば、兎に角どろんをきめる相談も纏まるだらうと。そればかりぢやない、ワーシカは、驅立勢も官憲も皆出拂つたと聞いて、臆病が癒つた、同時に彼持前の無耻をまた取戻した。

「よからう、行かう。」と彼はにつこりした。

ヒョードル・グニャーウイは頭を振つた。しかし何も言はなかつた。

## 一三

酒屋のほとりには、驅立の役に立たない、年寄の百姓が五六人、腰を卸してゐた。彼等と一緒にエゴール・シパーエフもゐた。シパーエフは今では始終此の『専賣屋』に姿を見せてゐた。彼は家にちツとしてゐられなかつた。マトリョーナを見れば、むらくと込み上げてくる憎惡の念を、また自分の空想に對する痛惜の情を何うすることも出来なかつた。更に、小さなフェーヂカを見ればもう狂亂の極に達するのであつた。だから彼は毎日些細なことにも妻を打つた、妻を打つては、外出して酒に浸つた。

驅立に彼が加はらなかつたのは、自ら妻の情夫を捕へに行つたとか何とか言つて、百姓共から笑を受けるのが苦しかつたからであつた。



今や、彼はもう飲むだけ飲んで、ビートルの話年寄達にきかしてゐる所だつた。「へー。王様をも見て来たのか？」と、薄禿の毛皮匠で、ピチユーゴフといふ、物好きな又話好きな人間が彼に訊いた。

「それはかうなんだ。」と、酒飲らしい物體をつけて、エゴール・ジバーエフが答へた。そして何か語り出さうとすると、丁度其處へクウブリヤンとモジャーウイとワシカが寄つて来た。

クウブリヤンもエゴールを知らず、ジバーエフもクウブリヤンを知らなかつた。だから彼等はお互に少しも注意を拂はなかつた。

それにひき替へて、ワシカとモジャーウイは膽を潰してしまつた。

「さア大變だ。」と、ワシカは思つた。「搦合つてしまつたぞ。」

モジャーウイは恐ろしがつて、眼を瞬いたり、きよろ／＼あたりを見廻したりした。

百姓等は、クウブリヤンを見つけて、些も異みはしなかつた。どうせ役人衆が捕へに行つたあたりに、彼のゐる筈はないと、前々から思つてゐたのである。しかし彼等のうち誰も口を利かなかつた。

「や今日は、年寄ばかりだネ。」と、ワシカは嬉しさうな聲を出した。

百姓等は一人一人帽子を擡げた。

「酒蹴りかい？」と、ワシカは言葉を續けた。エゴールに物言ふ機會を彼等に與へてはならぬと思つたのである。

「見たら分るぢやないか。」と、耐え兼ねたやうにエゴール・ジバーエフが答へた。

「それでいよく、俺達が宮城の衛兵に行つた時……。」

「宮城の？」と、ピチユーゴフは魂を消した。そして感激のあまり平手でもつて禿げた頭を擦つた。禿げた所は酒を飲んだために汗ばんでゐた。

「ラム、宮城の。」と、物體ぶつて、エゴール・ジバーエフが繰返した。

モジャーウイはクウブリヤンの袖を引張つた。

「クウブリヤ、おいクウブリヤ……。」

「何だい？」

「行かうや……。」

モジャーウイは躊躇した。

「エゴールがそこにあるんだ。」と、さも怖さうに眼を瞬きながら、そつと言つた。

クウブリヤンは蒼くなつた、それから今度は眞赤になつた、そしてエゴールの方をちいッと視詰めてゐた。その唇はぶる／＼震動してゐた。彼は最初一氣にシパーエフへ飛びかゝらうとして、既に拳骨を固めたのであつたけれど、やがてそれを制止して、顔を歪めて苦笑した。そして、ひよろ／＼しながら、エゴールの方へ寄つて行つた。

「や、今日は。」と、嘲るやうに彼が言つた「宮城の話は珍らしい。」

ワーシカは頭の後を掻いた。そして、

「ほら、紛亂になるぞ！」と思つた。

モジャーウイはもうぶる／＼して逃げ仕度をした。

「まア腰をかけて聽けよ、ふざけない譯なら。」と、尊大ぶつてシパーエフがクウブリヤンに答へた。

クウブリヤンはすつかり顔色を替へてしまつた。彼は口髭を噛み／＼あたりを見廻した……。

「何をふざけるツて。」と、言ひながら、彼はエゴールのそばへぐつと近く腰を卸した。それがためエゴールは少々尻を動かさねばならなかつた。「俺達はふざけることは不得手だ。ふざけるツて言ふのはお前等のすることだらう。兵隊の……。」

エゴール・シパーエフは胡散臭い顔をしてクウブリヤンを視た……。

「何を言つてるんだ？」嚴として彼はかう詰つた。

「何も言やしねえ。」と、あちこちに視線を移しながら、クウブリャンが口の中で答へた。「たゞ兵隊ツて者はふざける者で、それから俺達は野暮な百姓だと言つてるんだ……。」

「は、あ、貴様は酔つてるナ？」と、顔を盛めて、エゴール・シバーエフが言つた。

「酔つてるさ、酔つたツて、何も、貴公の金で飲んだ譯ちやあるめえし、大きなこと言ふな、飯盒！」と、荒々しくクウブリャンが答へた。

エゴール・シバーエフは皆の者を視た、そして其の顔色によつて、これはたゞ者でないと見てとつた。彼は一層氣をつけて、クウブリャンを噴めた、すると長年見ないでも、その顔はやつぱり記憶に浮んで來た。

彼は紫色になつた。その眼はまん圓になつた。

「貴様あ……何をからまるんだ？」と、巨大な拳骨を握りしめながら、呟いた。

クウブリャンは上目をつかつて、きりつと彼を睨みつけた。

「何も糞もあるか！……。」と、急込んで答へた。

エゴール・シバーエフは黙つてゐた。そしてますます紫色になつた。

「これく、お互に止せや……。」何にもなりやしねえ。」と、當惑して禿げた頭を擦りながら、ピチーユフが喙を容れた。

ワシカはワシカで、クウブリャンに肩を摩り寄せて、

「おい、兵隊、さう怒るなよ……。」破裂するぞ。」と、エゴールに横柄なことを言つた。

エゴールは氣むづかしい眼付をして、彼をちらりと見た。と思ふと、ただ一と衝きに彼を脇へ押しつけて、拳を振翳したまゝ、クウブリャンに飛びかゝつた。

「待て……。」待て悪黨共！」と、百姓が口々に喚いた。

クウブリャンは、ひらりと身を交して、一撃を避けるや否や、急に手速く、然しうん

と力を入れて拳を揮つた。そしてエゴールの顔を殴つた。

「えへッ！ と、毒々しくワーシカが咳拂ひをした。

エゴール・シバーエフは、自分の鼻から迸り出る鮮血に塗れて、ふら／＼と蹠つまづいて行つて、壁に肩を叩きつけて、そのまゝ地面ちべたにへたばつた。

「手出しをするな！」と、吐き出すやうに、短く、クウプリアンが言つた。

彼は、兩足を擴げて、重く息をしながら立つてゐた。そして憎々しげにエゴールを眺めてゐた。

エゴールは蹠つまづきながら起ち上つた。

「何糞、待つとれ……。」と、呟いて、彼は鼻から流れ出る血を指先で拭つた。

「手出しをするなど言つて置いたに。——熊くまを見ろ、兵隊！」と、一方からワーシカが毒ついでゐた。

エゴールは兩拳を握りしめた。しかし其の場から動かなかつた。

「行かうクウプリア。見ろ、あの野郎、貴公の御馳走で氣が抜けちまつた……。行かう／＼！」ワーシカは頻に迫つた。

「此の馬の骨め、手前もやッぱり何だゾ。氣をつけてろよ！」と、ピチューゴフが呟いた。

「何を氣をつけるんだ？」と、ワーシカが會心の笑を湛へながら言ひ返した。「貴公等が七人で、こつちが二人ツてことか……。偉いもんだよ、でもこりやア宮城の衛兵とは違ふと見えらア……。」

エゴール・シバーエフは發作的に彼の方へ進んで行つた。けれどクウプリアンが素早くその道を遮つた。その瞬間、二人は互に火の出るやうな視線を交換したが、廳でエゴールが身を退きながら、拳を見せて威嚇した。

「今に見ろ、懲らしめてやるから、悪漢め……。貴様は俺の……。何だらう。待つとれ……。」

「何を？」

「それ、皆が。」と、細い聲を出して、エゴールは百姓共に下知した。「何を愚圖々々してゐるんだ……。それ此の野郎を！……。」

百姓共は逡巡した。

「混棒で彼奴等を。」と、ピチューゴフが獨語ちた。

「黙れ、老筆。」と、ワーシカが叱りつけた。「その混棒の御禮には、松の木片で貴公等の家を燃してしまふぞ……。」

「馬泥坊め……。」

「何うしたんだ、皆！」と、怨めしさうにエゴールが叫んだ。百姓共は濼い顔をして黙つてゐた。

「行かう、クウブリヤ。」と、戯れるやうにワーシカが言つた。「いくら居たツて、もう同じことだ……。一人、鼻柱を打挫けば澤山だぞ。みんな満足したやうだから、

さ、行かう！」

クウブリヤンも笑を浮べた。

「行かう。」

彼はエゴールから眼を外らさずに、かう言つて同意した。

彼等は出掛けた。

「どうせ此の儘にやして置かねえぞ、泥坊め。」と、その背後へ、ピチューゴフが叫んだ。

「ヘン、こつちでは貴公等を此の儘にしといてやらあ！」と、ワーシカは笑つた。

エゴール・シバーエフは二人に拳を示して威嚇した。

「鼻でも拭けよ、兵隊！」と、ワーシカがそれに嘔鳴つた。

彼等は再びグニャーツイの家へ戻つた。

「一と仕事やつて来た！」と、ワーシカが髪の毛を振りあげて、言つた。

グニャーウイは、唇をきつめて、両手を帯に差込んだまゝ、二人の言ふことを聴いてゐた。

「成程。」と、彼が口をきつた。「悪いことをして来たもんだナ……えゝ？……。ぢやア、賑やかだつたが、もうこれからは……。」

クウブリヤンは胸騒ぎを覺えた。

「これからは何うするツて……。」

グニャーウイは黙つてゐた。

「つまりなア、これからはお前達も俺の所に居られなくなるんだ。」

「そりやアさうだ。」と、悲しさうにワーシカが溜息をついた。

「汗でも吸つて、林へ行け！ さうしないと、夕方には此處へ驅立勢が押寄せて来るぜ。困つたことをして呉れた……。」

「くよくよするな！」と、ワーシカが叱るやうに言ひ放つた。

彼等は家の中へ這入つて行つた。

「アニュータがそこに遊んでゐるぜ、うちの小さいのと。」グニャーウイがクウブリヤンに告げた。

赤い被巾を着けた女の兒が家の中にゐた。彼女はクウブリヤンを見つけると、そのそばへ駆け寄つた。

「クウブリヤ叔父さん、あのね……。」と、高い聲で彼女が話しかけた。

「何だ？」とクウブリヤンは悦んだ、そして顔を赤らめた。

女の兒は趾頭で伸び上つて、彼の耳元へ大きな聲で囁いた。

「マトリョナ伯母さんが来て呉れツて言つたよ、是非来て呉れツて言つたよ。」

「何時？」と、クウブリヤンは澁い聲で訊いた。

「明日の晩方……畑へ……。是非来て呉れツて言つたよ。」

「よし〜。行く……。」

「乾度よ。」と、女の兒は繰返した。「ぢや私、もう歸らう。」  
「歸れ。」

「あゝ歸る。」と言つて、アニュータは片足で跳ねながら、家をどびだした。その後から、グニャーウイの小兒等がきやあゝ言つて追ひかけた。

グニャーウイは煖爐の中から汁椀と匙とを取り出した。

「食つたら、まづ出掛るとしろ。」と、彼が言つた。

## 一四

クウブリヤンとワーシカが外へ出た時には、もう日が暮れてゐた。

驅立の者はまだ歸らなかつた、で往還は人通もなく暗かつた。

次の横路へ曲る所で、クウブリヤンとワーシカとは何だか、路上に横たはつてゐた大きな柔かい體みたいなものに突當つた。ワーシカは、も少しで倒れる所だつた

が、辛うじて塀に取紐つた。

「おツと、畜生！」彼は罵つた。

それから黄昏の淡い光に透かして見て、にっこりして言つた。

「何だ、酔ひ潰れてゐるのか。」

クウブリヤンも顧みた。

「誰だ？」

「フオマだ。」と、嬉しげに齒を露出して、ワーシカが告げた。そして何故かしら酔漢を引立てようとかゝつた。

「よせ！」と、クウブリヤンが言つた。

酔漢は喉で唸つて、ぶつく／＼唸いた。

「これでも俺の代父だ。」と、嬉しげにワーシカは説明してから、今度は酔漢の肩を掴んで、大きな聲で言つた。

「おい親爺、起きろ！ 帽子が無えぞ！……。」  
醉漢は寢返をうつた。

「うそを……言へ……。」と、彼が呟いた。

「可笑な男だ。」と、ワーシカは首を振つた、「本當に無えぞ……。それ起きろよ！」  
醉漢は黙つて、何か思ひ運らしてゐた。

「さうだ……。起きる。」と、太い聲で言つた。

フォマは両手を突張つて、身を起し、それから膝をついて立たうとしたが、ふらふらと揺れて、また尻餅を搗いた。ワーシカは面白さうに笑ひ崩れた。フォマはぼかんと馬鹿みたいに彼を見てゐたが、聽て笑を浮べて、面白さうに喉で言つた。

「婆々が死んだよ！」

「えゝ？」ワーシカは狼狽へて訊いた。

フォマは塀に噛りついて、足を立てた。股引と襪襦袢々々の更紗の上衣とを纏ふた巨

漢で、髪の毛はもしやくに亂れ、足は跣足だつた。彼はどつちへでも體をひよろつかせながら、また繰返した。

「婆々が死んだよ！」

「貴公の所の婆々か？」と、クウブリヤンが訊いた。

フォマは笑ひ出した。

「他人のぢやねえ……。二十年も連添ふてゐたに……。死んぢやつた。」

三人とも黙つてしまつた。ワーシカは蒼白い空を見上げて、何ともつかぬ笑ひ方をして、そしてクウブリヤンを見遣つた。

「何で死んだい？」と、クウブリヤンが訊いた。

フォマはぐらついて、吃逆をして、片手を振つて見せた。

「死ぬ時期が來たのだ……。臟腑が焦げてしまつた！……。」

「さうか。なら貴公は何だつて酔拂つてるんだ？」



フォマは急にめそ〜泣き出した、そして、ふら〜と蹠よちめいた。あまりひどく蹠よちめいたので、クウブリャンにつかまつた。

「俺が酔つてゐるのはナ、兄弟……。こりやお前だつて……。その……。酔ふぢやねえか。死なれてしまへば、兄弟……。今ぢや獨り身だ！」

フォマは不自然に見える程勢よく首を振つた。

「死なれたから……。それで俺や飲んだんだ……。お前にも解る……。切り離された一本指のやうなもんだ、な兄弟……。」

フォマは懐なつかしげにクウブリャンの眼許めもとを眺めながら、哀れに微笑した。そして言つた。

「苦しい！」

クウブリャンは考へてゐた。

「何故醫者を呼ばなかつたんだ？」

フォマは重たさうに片手を振つた。

「呼んだ、代診が來たんだ……。でも神様に逆らうことは出來ねえ……。おさらばになつちやつた、クウブリャ。」と、不意に附け足した。

「それぢや、まアいゝや！」と、ワシシカが應こたへた。

「さうさ。」と、嚴肅に言つて、クウブリャンは直ぐまた添へた。「何時死んだ？」

「昨日。」

「埋葬とちらひは？」

「まださ。和尚さんがいけねえてんだ……。」

「何故？」

フォマは思ひ運めくらさうとして一心を籠めた。

「あ、さうだ……。俺が和尚さん所へ行つて、死んだつて云たら……。うん、その住職が俺に、待て！ といつたんだ。」

クウブリヤンは怪訝な顔をした。

「出鱈目を言ふなよ、いくら酔拂つても！」

「出鱈目？ 誰も出鱈目なんか言つちやめえ……。丁度和尚さんが町へ買物に行かうツて所、其處へ、此の俺が行つて、婆々がその……と言つたもんだから、むかふでは、待て、行つて來てからと言つたんだ。」  
ワシカはくすくす笑ひ出した。

「こりや奇抜だ……待てとは聞いて呆れらア……。和尚が買物に行て來るまで、女を死なせないといふ宣言が出たか……。こりやア奇抜だ！」

クウブリヤンも顔を歪めた。

「で、貴公は何と言つた？」

「俺か？ 俺や何とも言やしねえ……。また言ふことは無えだ。和尚さんは和尚さんだし、俺や土百姓だし……。なア。でもそれからといふもの、家にゐると怖氣に囚

はれてならねえ。で、まアかういふ工合に……。」と、フォマは勢よく吃逆を一つやつた。「だが、やツぱりあの婆々から魂は抜けちまつたんだ……。あゝ胸が苦しい……。」

クウブリヤンは陰氣な顔をして黙り込んだ。

「左様なら、親爺！」と、ワシカが言つた。

「それちや、まア左様なら……。」フォマはふらふらしながら、吃逆をしながら、惡氣のない返事をした。

彼等は別れた。

二人の者は河の方へ降りて行つた。が、フォマの巨大な襤褸々々な姿は、暫らく坂の上に黝すんで見えた。彼は蒼白い縁が、つた夕空を背景にして、蹣跚いたり、兩手を振つたりしてゐた。

「和尚さんは和尚さん、俺は百姓……。土百姓……。。」と、呟いて行つたが、やがてフ

マは塀に沿つた柔い粘々した泥濘の中へのめつた。

## 一五

クウブリヤンとワージカとは、濡れた細い猫柳の小枝にひっかかりながら、また緩んだ粘土の坂路を滑りながら、河の方へと降りた。

水は緩やかに、極めて緩やかに流れてゐた。そして其の面からは濕氣と冷氣とが漂つて来た。あるともしもない小波が静かに足許で跳ねかへつて、心持泡立つてゐた。出水の時壓されて折れた去年の蘆が、低く闇の底を覆ふて、何だか、

「寒いな、兄弟……。」

とでも言つてるやうに、悲しげな音を發してゐた。

厚い雲はすつと低く垂れ下つて、今にも緩やかな柔い雨が降りさうになつてゐた。

岸の上では病みほけた細い灌木の枝が、便なくも風に揉まれてゐた。

ワージカは身を竦めた。

「氣味が悪いぢやねえか。」と、彼が呟いた。

一方の岸は見えなかつた。そして、黒い、小駄みなくさはついてゐる水が、その中程で暗い重い空と融け合つてゐるやうに思はれた。

「何處で寝ることにするんだ？」

「此の場に寝てもいゝんだ。」と、平氣でクウブリヤンは答へた。

ワージカは肩をすばめた。

「何うやつて？」

「たゞ……かうして……。」

クウブリヤンは嘲笑するやうな眸で彼を眺めた。

「そんなら、ヒョードルの所へ行かうか……。」

「捉はる。」

「ぢや何も言ふことは無えや。」

クウブリヤンは足で踏んで見て、比較的乾いてる場所を擇んで、腰を卸した。ワシカは頭の後を搔いて、矢張そのそばへ座つた。

二人共、暗い河の面を見て、黙つてゐた。風は烈しい勢で岸傳ひに波を追ひかけた、そして時々、波の頭から離れ飛ぶ、煙のやうな細い、冷たい繁吹しよきを浴せかけた。二人はその風を防がうとして、だん／＼互に身を寄せた。

ワシカは、背中を曲げて、早くも微睡まきろみ始めた。が、クウブリヤンは凝じつと河の面を睥みめたまゝ、しばらく何事か考へてゐた。

ふと、彼が體を動かした。

「和尚の奴……。」

ワシカは、はツと我にかへつた。

「何？」

「いや、和尚の奴よう……。」

「うん、さうか。」と、言葉を引き伸ばして、また微睡み始めた。

風が勢を改めて押寄せて來た。それで枯蘆が長い、弱い、泣くやうな音を響かせた。

「よし、和尚は買物に行つたか？」と、クウブリヤンが言つた。

ワシカがまた頭を擡げた。

「そりやアもう儘に行つた……。俺も見た、朝一人で出掛けた。」

「一頭でか、二頭た立てか？」

「一頭で……。」

ワシカは、何やら思ひ當つたと見えて、顔を盛しかめたが、急に指をばちんと鳴らした。

「素敵々々、丁度また此の際……。」

彼は起ち上つて、白い齒を露した……。

「行かうか？」と、クウブリャンが訊いた。

「無論の事よ……。こんな好機會がまたと得られるもんか！……。」

クウブリャンも起つて、帽子を直して、それから小枝に取纏つたり、足を這らしたりしながら、もと来た方へと坂を攀ぢ登つた。

ワシカはその後に跟いて登つた。

「何うして、こんな巧いことが、直ぐ頭に昇つて来なかつたのかなア、畜生！……。」

彼等は上に登ると、二匹の飢ゑた狼のやうに、つと身を匿して、路上を窺つた。

放牧地のむかうは、すぐ柴垣や塀になつてゐて、その又むかふには、黒い建物の塊が闇に濡れてゐた。屋根は壊れかゝつて、裸の骸骨のやうであつた。

白揚や白樺が、彼等の頭上で長い不斷の騒音をたてながら、葉も無い頂を力なく揺つてゐた。死んだやうな静けさであつた。たゞ何處かしら村の一角に、單調な鈴

の音がして、遠い／＼遙か先方では、犬が微かに吠えてゐた。

クウブリャンとワシカとは、四邊に氣を配りしな、もと来た方へ放牧地を横切つて行つた。野菜畑の側を通り、盲ひた黒い窓の家の側を通り抜けると、廣場に出た。

その廣場のたゞ中に、教會の障壁がほんのり白く闇に浮んでゐた。

「和尚の奴歸つてるかも知れんぞ？」ワシカがひそ／＼と注意した。

「なあに……。そんな事があるもんか。」クウブリャンも亦そつと言ひ返した。「窓が明るい……。屹度宵のうちだけ歸りを待つてゐるんだ。」

和尚の居宅は、亞鉛屋根の白い家で、大きな腰掛格納庫と竝んでゐた。その一つの窓に、淡い燈火の光が映してゐて、窓の上には更紗の窓掛と二つの鉢植とが見えてゐた。

クウブリャンとワシカは門の所へ寄つた。

「犬がゐるか？」と、クウブリャンが訊いた。

「ある筈だ、若し和尚に跟着行って行かなけりやア……。」  
「叩いて見い……。」

ワシカがそつと塀を叩いた。

邸の中からは何の應へも無かつた。

「屹度ゐないんだ。」と言つて、ワシカは門の傍のベンチに登つた。

「見えねえ。」

「這入れ！」と、クウブリャンが囁いた。

ワシカは音もなく、巧みに塀の上へ登ると、そこに留まつて、敏感に聴耳を立てゝゐたが、ひらりと下へ跳び降りた。鏝が静に音をたてゝ、耳門が開かれた。

クウブリャンは邸内に這入つた。

中は廣く、草に覆はれて、さつぱりとしてゐた。

彼等は静かに、忍びやかに、母屋のそばを通つて、厩の方へ行つた。ワシカが

片手で探つて見た。

「錠がおりてる！」と、傳へた。

今度はクウブリャンが錠を觸つて見て、懐中から小さな鐵挺を取出して、蝶番に差込んで、扭つた。錠は動かなかつた。クウブリャンは猶も力を入れて扭つた。すると何かめり／＼と言つて、その途端に門がどしんと下へ落ちた。

「えい！ 糞！……。」と、クウベリャンは呟いた。

ワシカは戰慄して、後を振り向いた。二人共、母屋の方へ首を廻したまゝ、息の根を止めてゐた。彼方は依然として暗く静かであつた。一番端の窓に淡い光が揺いだ。

「家には年寄の和尚が一人居るんだ……。若手の和尚の親父で、定員外の奴さ……。彼奴はもう大概變者だ、まるでよぼ／＼だから！」と、ワシカが囁いた。

クウブリャンは戸を開けた。中の方から生漚い馬糞の香がして、闇に見えないけれ

ど、馬の懐しさうな鼻息が聞えた。

ワシカは戸口に残つてゐた。

萬物皆寂としてゐた。たゞ教會堂のそばの菩提樹の頂に、微風があたつて鈍い騒音をたてゝゐた。和尚の所の窓には燈火が閃いてゐた。厩では用心深い轡の音がした。馬は未知な人間に感づいて、怖る／＼鼻を鳴らした、そして柔い馬糞を足掻いた。クウブリヤンはすツかり闇に溺れてしまつた。

ワシカは頻に覗き込んだ。その眼は大きく開かれて、緊張のあまり涙含んで来た。

「もう直ぐか？」と、彼は闇の中へ囁いた。

「すぐだ。」と、その方から微かに聞えた。

馬の蹄が板張りの床に音をたて始めた。何となく闇が動揺しだした。と思ふと、俄にその中からクウブリヤンの姿が浮び出た。續いてその後から、怖さうに耳を豎

てゝゐる大きな馬の頭が現はれた。

「栗毛だな。」と、嬉しさうにワシカが言つた。「これなら、あれよりはすツと良い

……。先頃買つたばかりのだ。和尚の奴、村中に誇つてゐた……。」

クウブリヤンは刃のやうな微笑を浮べた。

「此の位のこととはしてやる必要がある……。まア出掛けろ、彼奴が待つてらア……。」

「なに？」と、解し兼ねてワシカが訊き直した。

「馬を待たして置くんだよウ……。フォマに待つてろと言つてあるぢやないか？……。」

ワシカはくす／＼笑ひ出した。

「だが、こりやア何處へばらす？」と、クウブリヤンが訊いた。

「ジブシイの……。トロフィムにヨ……。他に遣り場は無えや。」

クウブリヤンは考へてゐた。

「よし、ちや貴公は出掛ける。俺は一寸……用事がある。」

「また女のところか？」

クウブリヤンは厭氣いやげに何か呟いた。

ワーシカは莞爾わんじりして、肩を揺つた。

「奇怪な奴だな！……」

「まあいゝ。」と、不満さうにクウブリヤンは遮つた。「ちや貴公は此の馬をトロフィムに渡して来い。駄目だぞ、安くしちや。馬が良いんだから、で貴公は明日の晩歸つて来いよ……。間違ひなく。」

「貴公は何處たてがみにゐる？」と、ワーシカは馬の鬣たてがみに手をかけて、腹をその軀からだに寄せながら、訊いた。

馬は、溫和おとやかしい大きな眼で怖る／＼眺めて、重たく且從順に溜息を洩らした。

クウブリヤンは馬の顔を撫で、ゐた。

「グニャーウイに訊けば分る。」

「ふム、よし／＼……。ちや行くぞ！」

クウブリヤンは放した。ワーシカが馬を進めた。馬は軽く脚を運びながら、邸を抜けて門の方へと向つた。クウブリヤンはその後から跟ついていて行つた。そして空にくつきりと描き出されたワーシカの黒い半面像シムエトを下から見あげた。

「良い馬だなア。」と、繰返してクウブリヤンが言つた。

彼等は母屋の出入口と並行する所まで来た。

出入口の扉がぎいツと軋つて、老人の聲が鈍れ／＼問ひかけた。

「阿父おぢつあんかナ？ 喚なをくなつたぢやないか？」

ワーシカは本能的に馬を曳張ひっぱつた。馬は勢よく門の方へ突進した。しかし、クウブリヤンがその轡しんを捉へて曳き留めた。



「待て。」と、彼はフーシカに言った。

フーシカはたゞ怪訝な驚いたやうな顔をして、彼を横目に見たばかりであつた。

「お前は阿父つあんだらうな？」と、年寄の和尚が出入口の所から繰返して言った。

「俺だよ。」と、クウブリヤンは高らかに答へた。「違者で結構だな、和尚！」

「あ？」と、出入口の所から、和尚がまた訊いた。

「さうだ、貴公でも同じことだ……。」と、毒々しくクウブリヤンが答へた。

「何だ、おい？」フーシカが囁いた。

「こつちの事だい。」と、クウブリヤンが亂暴に言った。

和尚は疑と見据ゑてゐたが、やがて事態が解けた。

「泥坊奴等、何をそこらでしてゐるんだ？」と、彼は顫ひ聲で叫んだ。

「貴公の家の馬を貰つた所だよ。」と、クウブリヤンは態とらしく丁寧に答へた。

「助けて呉れ！ おーい！」和尚は細い緊張した聲で嗷鳴つた。

「何言つてゐるんだい、老耄！」と、威嚇しながら、クウブリヤンが囁つた。

フーシカは馬を曳張つた。馬は一目散に門外へ飛び出した。そして路なりに曲がると、大駈で走つて行つた。

クウブリヤンは動かなかつた。

「おい和尚、イワンの奴が歸つたら、さう言ふのだぞ。これは彼奴がフォマの婆々にした仕打の報だつて。いゝか。」と、彼は、出入口の方へ前進しながら、嗷れ聲で言ひ放つた。「矢張待つてゐるが、いゝや……馬を……。」

和尚は玄關の中へ後退りして、ばたんと扉を締めると、猶も大聲に、猶も緊張して叫び始めた。

「助けて呉れ……誰か助けて呉れ——……。」

クウブリヤンは門の外へ出て、フーシカの姿を見送ると、道を反対の方にとつて、河の方へと駆け出した。後の方では懸命に救助を求める年寄和尚の聲と、も一人誰

かしら女の聲が聞えてゐた。

「助けて呉れ！」と、夜の沈黙を破つて響き渡つた。

近隣の家々では犬が吠え始めた。人々の騒擾と話聲とが聞えて來た。

クウブリヤンは往還を走つてゐた。

郡役所の所まで來ると、彼の注意は軽い鈴の音と照り映えてゐる窓とに引きつけられた。彼處には驅立の引率から戻つて來た警視や、村長や、書記や、巡查などが坐つてゐた。彼等は酒を飲んで長尻になつたのであつた。巡查は朝早く出立する仕度をしてゐた。それで役所の傍には、最早ちやんと馬が仕立て、あつた。而もそれは役所用のではなく、村長の所の馬であつた。役所の馬は皆出拂つてゐたので、村長が特に敬意を表して、之を巡查に貸與したのである。

馭者は玄關の中へ這入つて居た。で馬だけが出入口の所に、頭を垂れて、軽く鈴を鳴らしながら立つてゐた。

クウブリヤンは、それを見ると、一瞬時の間立止まつてゐたが、矢庭に其の四輪馬車へ飛び乗つて、手綱を取ると、その場から全速力を出して馬を驅つた。鈴は荒々しく滅茶々に鳴り出した。馬車はがた／＼と震動しだした。

郡役所の中から、十人ばかりの百姓と、書記と、巡查とがぞろ／＼と駆け出した。

「さア大變！」と、村長は股の邊を打つた。

「抑へろ！」と、細い聲で書記が喚いた。

巡查はピストルを掴み出した。

「待て——。待て！」と叫んで、彼は顛へる手先で狙を定めて撃つた。

クウブリヤンは馬車の中に跪いたまゝ、たゞ身を屈めたゞけで、尙一層迅く馬を驅つた。そして、自分ながら何のためとも知らずに、たゞ其の胸に漲る一つの明るい奔放な感情にかられて、彼は咽喉一杯の聲を揚げた。

「捕へろ、クウブリヤンを——！」

巡査は尙一度發射した。

到る處から百姓共が跳び出た、犬共が吠えた。耳門がどたんばたん鳴つた。

「抑へろ！」と、往還を驛地に走せながら、村長は援を求めた。

馬車は村外れに飛び出すと、林を指して進んだ。クウブリヤンも最早叫ばなかつた。たゞ馬を急きたてゝは、鞭をあてた。

村の方では犬が吠えてゐた、男や女の聲々が無數に喚き立つてゐた。

林に着くと、クウブリヤンは馬を止めて、馬車から飛び降りて、馬の方へ駆け寄つて、鈴を脱つた。それからまた、呼吸の續く限り馬を驅つた。そして程なく道から外れて、林の中へ這入つてしまつた。道から三露里位行くと、彼は馬車を密林の中へ曳き込んで、泡を吹き、息を切らし、軀をふらく／＼さしてゐる馬を止めて、これをば手綱で樹に縛りつけた。さうして、彼は此の場から離れて、林の中を急いだ。「若し奴等に見つけられなければ、明日つれて行かう！」と、彼は思つた。

## 一六

木の葉の吹き溜まつた窪い所に一夜を明かしたクウブリヤンは、終日沼の近くの林の中に坐つてゐた。其處はワシカと示し合せた所であつた。

天氣の好い、そして何となく冴え渡つた日であつた。太陽は穩やかに輝いてゐて、照りつけなかつた。でも草や、落葉や、樹木など、到る處に長い糸で張られてゐる蜘蛛の巢と、黄色い木の葉だけは金色に染められてゐた。さうして蜘蛛の巢の軽い糸が靜に宙を飛んで行くので、林全體が金色の絲で縫はれてゐるやうな氣がした。

空も朗かに青々として、これまた冴え渡つてゐた。時々林の上空高く妙な音聲を聞くのであつた。その度にクウブリヤンは頭を擡げて、青空の奥に見え隠れする鶴の群を見た。此の痛ましい啼聲こそは、クウブリヤンの耳に聞える唯一の音聲であつた。

「飛んでやあがる……。いゝ事だなア！」と、クウブリヤンは思った。「何處へなりと勝手に飛んで行くがいゝ……。土地を耕すぢやなし、馬を盗み出すぢやなし、税金を拂ふぢやなし……。いゝなア！」

正午頃沼のふちに一匹の狼が出て、敏感に氣を配りながら、空地の彼方へ向いて立つてゐた。その落込んだ肋骨や、もじや〜した毛を震はしてゐる瘦せ脱けた腿のあたりが、クウブリヤンにはよく見えた。狼は一才立つて鼻をピコつかせてゐたが、やがてその瘦せ細つた脚を高くあげて、林の奥へ駈け込んだ。

「俺達の兄弟だ。」と、クウブリヤンは莞爾した。「やッぱり捉へられるんだ。——容赦はないぞ……。さうだ。食はねばならぬといふことが既に因業なんだ。」

クウブリヤンは悲しく淋しくなつた。

彼はもう大苦を抱いて、ワシカの現はるべき方角を見遣るのであつた。しかし其處には相變らず、林が鐵壁のやうに立ち塞がつてゐて、ひら〜と緩く音もなく

枯葉を落してゐた。蜘蛛の巢はまだ金線を以て張り續けられてゐた。

クウブリヤンは寝轉んで見たり、起き上つて見たりした。

太陽は西に傾くやうになつて、その光線の斜な矢が林一杯に引かれた。沼の土には仄かに霧が現はれて來た。

終に、クウブリヤンは堪へきれなくなつて起ち上つた。

「えゝ糞、あんな野郎どうにでもなれ！」と、彼は憤慨まじりの痰を吐いた。「かうしてれば餓死だ。畜生、何處かへ足を入れてしまやがつた……。もう待つぢやあられねえ。」

彼は尙少時もぢ〜してゐた。

「マトリョーナが晩に來いと言つてゐた。」もうよい頃だ……。ぼつ〜出かけようとな彼は考へた。

エゴールの歸郷するまでは、彼は夕方になると、マトリョーナの家へ忍び込んだ